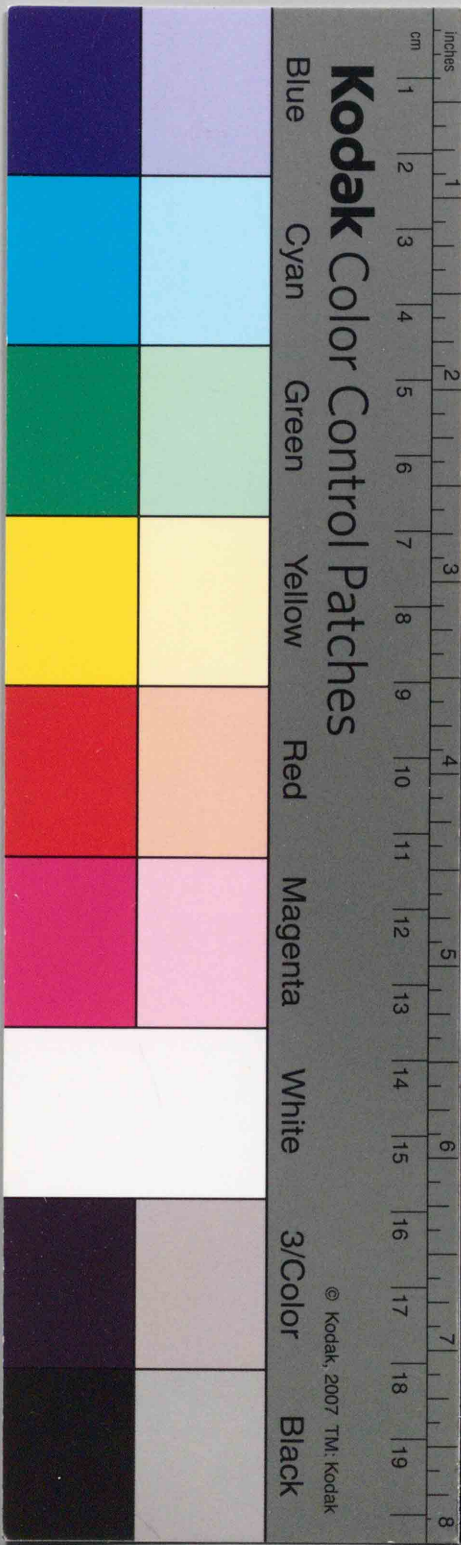
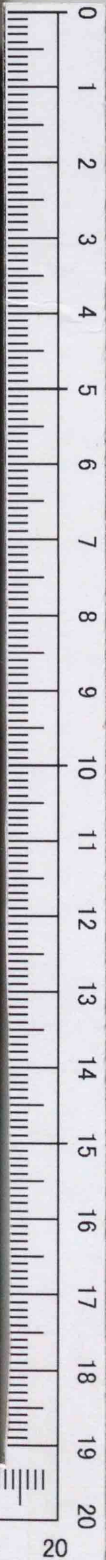


文作代現子女  
三卷  
士博學文  
著則義澤吉

4b  
816  
BB9

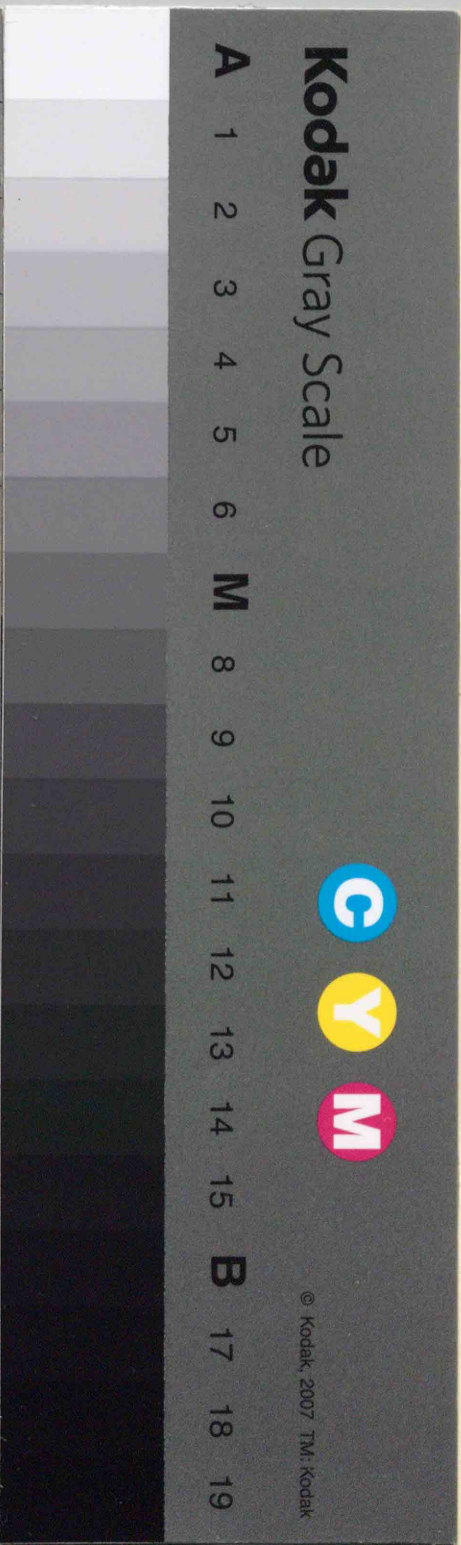
教科  
40-  
2000



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

G  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

43352

教科書文庫

4
809
40-1934
20000 68977



中央圖書館  
資料室

教科書文庫  
4  
809  
40-1934  
2000068977

46  
816  
189



文作代理子女

三第

著水義作名



広島大学図書  
2000068977  


都京  
在書野里





淵の説傳  
筆山周田飛

Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through or ghosting from the reverse side of the paper.



例言

一、本書は女子中等諸學校に於ける作文の教科書として撰述したものです。

一、文話はなるべく抽象的な論議をさけ、引例によつて解示する方法をとりました。これ一面に於いては、その了解を容易ならしめると共に、他面に於いては、作文に對する興味を誘起せしめんが爲です。

一、文話は易より難へ、ある一定の標準によつて按排せられ、全四卷を以て一つの纏まつた體系を成すものです。それ故、全卷に習熟することは、やがて、作文能力を涵養するばかりでなく、文藝鑑賞上の知識をも得られるものと信じます。

一、文話はなるべく簡潔にその要領を掴ましめんが爲に、各課はいづれも之を數段に分ち、各段の始めにその項目を太字で示しました。



一、例文は主として現代諸大家の作品中よりこれを選び、その表現上の手法を解説し、その制作心理に潜入してこれを味ひ、その純一な眞實性の力を闡明し、以て本文の所説と對照せしめました。

一、例文を熟讀玩味して、その高尚な情趣に涵り、その巧妙な筆觸を味ふことはたゞに自己の作文能力を啓培するばかりでなく、自己の魂の向上をはかる所以です。著者は讀者の例文によつて得るところ多からんことを切に祈るものです。

一、文藝的の作文に於いては、その本質上、隨意選題にするのも極めて良い方法には違ひないが、また一方には、類題の暗示によつて思はぬよい考が浮び出ることもあるのですから、本書は各課の終りにかういふ類題を掲げ、更に簡単な説明をも之に加へて参考に供しました。

昭和八年十一月

著者 識す

女子現代作文(2)

## 女子現代作文 卷三 目次

一 所謂三多の法	一
① 三多の法とは	一
② 多く讀むこと	一
③ 多く作ること	一
④ 多く訂すこと	一
⑤ 一誠意	一
二 趣味と實用	九
① 趣味の文章と實用の文章	九
② 心を表すこと心を傳へること	九
③ 知識の文章と感情の文章	九
④ 目的と用意	九
三 説明文	一八
① 説明文とは	一八
② 敘事文と説明文	一八
③ 趣味と説明	一八
④ 説明文に關する注意	一八
⑤ 説明文の種類	一八
四 聯想の動き	三三
① 觀察と聯想	三三
② 描寫と聯想	三三
③ 聯想の種類	三三
④ 縦横	三三



無礙の聯想

五 想像の世界

○創造の新天地―○創造の喜び―○想像の表現

六 昔噺を精しい文章に

○話の筋と想像の世界―○創造の世界を描くこと―○統一といふこと

七 韻文を散文に

○韻文の評釋―○韻文の情景描寫―○主想を敷衍すること

八 個性と類性

○個性と特徴―○個性と類性―○印象的な觀察―○簡潔と冗漫

九 餘韻といふこと

○餘韻とは―○想像力の刺戟―○餘韻を残す手法―○單純と複雑

一〇 紀行文

○旅の印象―○紀行文とは―○紀行文の種類―○紀行文に關する注意

一一 抽象と具象

○抽象と具象―○具象と感動力―○具象的な描寫

一二 生彩ある表現(一)

○生彩ある表現の研究―○比喻の種類

一三 生彩ある表現(二)

○誇張―○現寫―○漸層漸降―○對句―○反覆―○設疑―○逆語皮肉―○引用―○修辭の力

一四 人物描寫について



○人物を描くには――○外面描寫――○内面描寫――○背景描寫

一五 詩……………一五

○詩とは――○詩の行に就いて――○詩と童謠

一六 自由詩……………一七〇

○自由詩とは――○内心律といふこと――○自由詩の作り方

―(目次終)―

## 女子現代作文 卷三

文學博士 吉澤義則 著

### 一 所謂三多の法

一、三多の法とは 作文上達の工夫として、宋の文豪歐陽修は三多の法といふことを説いてゐます。三多とは所謂看多み、做多な、商量多りやうの三つであつてもつとこれを分り易く云へば、多く。讀み、多く。作り、多く。訂すことを云ふのです。この概念的な言葉は、時代の推移につれて、その内容――即ち讀み方、作り方、訂し方を幾らかづゝ變化しては來ましたが、爾後の文章家にとつては常にその技倆を鍊磨する指針と



なつて來た名言であつて、今日と雖も、作文上達の要訣は、なほこの三つの方法を出でないと云つてよいのです。それ故、もう少し詳しくこの三つの方法に就いて説明して見ませう。

二、多く讀むこと。古今の名文を多く讀むといふことは、慥かに作文の力を養ふ上には最もよい方法です。諸子の作文の力が、これまで讀んで來た多くの例文に負ふところが少くない事は、今更云ふまでもないでせう。しかし、その評語を参照して熟讀玩味すると否とは、例文の効果に著しい違ひがあつたであらう如くに、凡て文章は、たゞ漫然と讀んだだけでは、いかに多く讀んでも、その効果は極めて少いものです。それ故、自分の知識になる讀み方、ちやうど、食物が體の中に入つて、血や肉となると同じやうに、文章の一句々々が、私達の精神の糧となつて行くやうな徹底した讀み方をする事が大切です。ところが初の間は、文章の外面的な面白さに釣られて、何の批判

も鑑賞もなく、無自覺に、名文を讀過する事が多いものです。かう云ふ知識の收穫の伴はない讀書は、何の益にもなりません。それ故、自己を肥やす讀み方をする爲には、先づ次の三點に留意する事が肝要です。

(イ) 巧な用語を學ぶこと。名文に接すると、いかにも自在に用ひられてある語彙の豊富さに、驚歎させられる事が多いものです。私達は、それらの巧な用語を學んで、自分の詞藻を養つて行かねばなりません。云ふまでもなく、文章に巧な人は、必要に應ずる言葉が、縦横自在に頭の中から流れ出るやうな人です。それ故私達も、表現の内容にびつたり當て嵌まるやうな的確な言葉を求める爲には、どうしても、平常から心にかけて、語彙を豊富にし詞藻に培つて置かねばならぬのです。名文を多く讀むと云ふ事には、かうした方面から熟讀する事も、大いに必要と云はねばなりません。



(ロ) 技巧を味ふこと 表現上の技巧を味つて讀むと云ふ事は、やがて自らの技巧を練達する所以です。「なぜこの點が面白いのであらうか」「なぜかう云ふ風に書いたのであらうか」と云ふ様に、その言葉や言ひ廻し等に就いて穿鑿するは勿論、更に全體の構想や表現の態度に至るまで仔細に味つて見るならば、所謂文豪と云はれる人達の文章が、實によく整つてゐて、さう云ふ技巧に對しても、細心の注意が拂はれてある事に氣づくと共に、文章家達の表現上の苦心と云ふものも、自らうなづかれるのです。しかるに初心の間は、とかく絢爛な語句や流暢な措辭にのみ注意を惹かれて、眞の技巧を看過し易い傾があるものです。それ故、内心の躍動が果して如實に寫されてゐるかどうか、さう云ふ急所に潜み、内面に籠つた技巧の妙味を探ること、——即ち、いつでもその文章の生命にふれた鑑賞をするといふ事が大切で。

(ハ) 精神を汲むこと 名文の名文たる所以は、單にその用語や表現上の技巧だけに止まつてゐるのではなく、全篇に磅礴する眞實の氣韻——生命のひびきといふものにあるのです。それ故、文章の精神を汲んで、その内容を味ひ、その氣韻に觸れるといふ事は、名文を讀む上に於いて、特に必要な事です。名文の與へる内容が、いかに私達の思想を豊かにするか。いかに私達の足らざる實際の經驗を補つてくれるか。さう云ふ點に就いては、今更こゝに述べる必要はないでせう。しかし名文に含まれてゐる氣韻が、いかに私達の魂を高めるかといふことに就いては、よく考へて見る必要があります。かう云ふ氣韻は、巧妙自在な語句、洗煉された技巧、それらの一つ／＼によつて組織されてゐる全體の調和味と云ふものを鑑賞することによつて、始めて感得することが出来る、文章の雰圍氣です。私達は名文を鑑賞する場合、いつもその氣韻に觸れて



文章の妙味を悟り、自己の魂を高揚せしめる工夫を怠つてはならぬのです。

三多く作ること 嘗に作文と云はず、凡ゆる藝術は、習練に習練を積んで独自の境地を拓き、特異の技倆を練つて行くものであつて、どんな藝術家でも、その藝術が世に認められるに至るまでには、非常な努力と習作とを重ねて來てゐるのです。田山花袋氏が嘗て、

私はその時分毎月三篇の作をすることを課業としてゐた。今でもそれがちやんと残つてゐる。總計七八十篇はあるだらうと思つてゐる。どんな拙いものでも、三篇は必ず完成させる。かう云ふ習慣のもとに私はコツ／＼筆を執つた。纏める力といふことを私はさういふ境から得た。

—(小説作法講話)—

と、その習作時代の苦心を語つてゐられるのは、後進にとつては、よい刺戟であり、又よい手引です。

しかしこゝに注意せねばならぬ事は、多作も多讀の場合と同じや

うに、その一歩々々が自分の經驗となり、技倆となつて行くやうな力の籠つた作をしなくてはならぬと云ふ事です。何の感激も興味も伴はないやうないゝ加減な作品は、いくら多く作つても技倆の進歩にはなりません。その一言一句にも全精神を打ち込んで練習してこそ、眞の練習になるのです。

尙、一つ注意すべきは、常に獨創的な文を作るやうに心がけねばならぬと云ふ事です。これまでも屢述べたやうに、文章の生命は、眞心の表現にあるのです。いかに立派な文章であらうとも、他人の模倣は要するに他人の姿であつて、眞實の自己の生命が宿つてゐるものではない筈です。それ故、小さくとも拙くとも、あくまでも眞實の自己を表現するといふ信念を以て、創作の一路に精進する事が、やがてその人の大をなし、魂を磨き、作文の技倆を練る所以です。名文を鑑賞すると云ふ事も、結局獨創力に培はんが爲である事を忘れてはな



りません。

四、多く訂すこと 商量多とは多く工夫すること、即ち多く推敲する事です。言葉の価値は、要するに、それが如何に適切に、その内容を表現し得てゐるかにあります。すなはち、価値は言葉そのものの中にあると云ふよりは、寧ろその用ひられる場合の適否にあるのです。それ故私達は推敲によつて、自分の心が果して切實に現されてゐるか、その表現が果して価値あるものと云へるかどうかを味ひ訂さねばならぬのです。作文上達の道に、この推敲の、いかに重要缺くべからざるものであるかと云ふ事は、前卷に於いても既に詳説した所です。一言一句に生命の籠つた文章を作ると云ふのも、畢竟推敲の力に俟たねば出来ない事です。それ故、多作と多商量とは、兩々相俟つて、作文上達に關する直接的な二大指針だと云はねばなりません。

五、一誠意 凡そいかなる文章上達法も、究極は、一誠意に歸するのです。誠意なきところ、そこには如何なる道も開かれるものではありません。文章の根本は一誠意です。文章練達の根本も亦一誠意です。以上に述べて來た所謂三多の法の活用も、要するに、一誠意によつてその道が開かれると云ふ根本的の覺悟を忘れてはならぬのです。

## 二 趣味と實用

一、趣味の文章と實用の文章 文章は、これをその目的から見て、趣味の文章と實用の文章とに別ける事が出来ます。例へば、

梅 早春、衆木に先立つて花を開く。五瓣又は六瓣で圓く、香氣が甚だ高い。重瓣もあれば單瓣もあり、色は白又は紅を普通とするが、この外にも種々ある。



これは實用的の文章であつて、自分<sup>の</sup>思<sup>ふ</sup>こ<sup>と</sup>を<sup>は</sup>つ<sup>き</sup>り<sup>傳</sup>へ<sup>よ</sup>うと<sup>す</sup>る<sup>の</sup>が、その目的です。しかるに、

梅一輪一輪づつの暖かさ——といふが、そろ／＼南寄りの梅は、もう咲き出しさうな時候となりました。

櫻の花のおもしろみは、一夜の暖かさに、朝まだき思ひもかけず、しらじらと雲のやうに咲き揃うてゐるところにあります。それにくらべると、梅の花の趣は、かたい幹にあつた早春のなま暖い日の光が、樹の髓にしみ透り、枝から梢に傳はつて、やがてポツリポツリと一輪づつふくらんで來るところにあるやうです。

—(薄田泣菫)—

かうなると、全く趣味の文章であつて、作者自身<sup>の</sup>感<sup>ず</sup>る<sup>こ</sup>ろ<sup>を</sup>表<sup>さ</sup>う<sup>と</sup>する<sup>の</sup>が、その目的です。

二、心を表すこと、心を傳へること　すなはち、實用の文章は、心をはつきりと、間違ひ無く傳達しようとする必要に迫られて作られるものであつて、文章はその用を辨ずる手段であり方法です。文章それ

自身が目的ではないのです。しかるに趣味の文章になると、文章それ自身が目的です。心の中に鬱涌する感想が、そのはけ口を求めて、自ら流れ出たものです。外に對する必要から生れたものではなくして、全く内からの欲求によつて表現されたものです。實用の文章は、心の傳達を目的とし、趣味の文章は、心の表現を目的とするのです。それ故もし前者を心の鏡に譬へるならば、後者は正しく心の花とも云ふべきでせう。

三、知識の文章と感情の文章　文章は又その材料により、その訴へんとするところによつて、知識の文章と感情の文章とに分ける事が出來ます。例へば、

空はうら／＼かで風はあた／＼かで、今日は天上に神様達の舞踏會があるといふ日の晝過ぎ、白い蝶と黄な蝶との二つが餘念なく野邊に隠れんぼをして遊んでゐる。今度は白い蝶の隠れる番で、白い蝶は百姓家の裏の卵の花垣根に干してある白布の上に、ちよ



いと止つて静まつてゐると、黄な蝶はそこらの隅々を探して、釣瓶の中や井戸の中を見  
たが、どこにも居ないので、稍、失望した様子であつた。忽ち思ひついたかして、彼方の垣  
の隅に往つて葵の花を上から下へ一々覗いてもやはりこゝにも居ないので、仕方なし  
にもとの井戸端に歸らうとして、ふと白布の上の白い蝶を見つけた。  
——(正岡子規)——  
と云ふ様に書くとき、これは作者の想像や感情を表現し、専ら讀者の感  
情に訴へて、その共鳴を喚び起さうとするものですが、

暖かい日に蝶がいろんな花の上を飛んでゐるところを見ると、まるで花に酔ひ花に  
戯れてゐるやうである。ところが、これは花蜜を吸はんが爲に、忙しく働いてゐるので  
あつて、決して私どもが想像するやうな遊戯でもなければ、亂舞でもない。そしてこの  
際、蝶の體に着いた花粉は、他の花の柱頭に傳搬されるのであつて、これを植物學上、受粉  
作用と呼び、蝶蜂などの昆蟲を媒介として受粉する花を蟲媒花と云ふのである。

と云ふ風に述べると、これは知識的材料を用ひて、その傳へんとす  
る所を、専ら讀者の知識判斷に訴へたものです。即ち前者を感情の  
文章と見るならば、後者は全く知識の文章です。

#### 四、目的と用意

以上で私達の學び得た事は、知識の文章に於ける  
目的は、我が思ふ如く、讀者に思はせると云ふのであり、感情の文章に  
於ける理想は、我が感ずる如く、讀者に感ぜしめると云ふ事です。即  
ち、彼は實用であり、此は趣味です。彼は明鏡の曇なきを希ひ、此は美  
化の香ばしきを喜ぶものです。それ故、私達が文を草するに當つて  
も、その趣味の文章なるか實用の文章なるかによつて、その用意——  
制作態度を確立せしめてかゝらねばならぬのです。例へば、手紙の  
如きは實用的文章の代表的なものです。が、手紙は、注文にしても、勧誘  
にしても、見舞にしても、慶弔にしても、此方の心が相手に明瞭、正確に  
通じないやうでは、何の役にも立たないのです。よしんば閑談を敘  
し、詩想を傳へるにしても、その根本は、あくまでも相手に明確に分ら  
せると云ふ態度でなくてはならぬのです。しかるに、趣味の文章に  
あつては、知らせる、分らせると云ふ以上に、更に讀者の感性まで動か



①全く趣味的の筆であり乍ら力點はあくまでも新緑の色調に置いてありませう。そこに注意。

す力を必要とするのです。明晰と云ふ點にのみ留意した文章は譬へば、滋養の一點にのみ捉はれて、調味といふことを閑却した様なものです。讀者の食欲を誘發せんが爲には、どうしても、巧な調理が必要です。それ故、趣味の文章は、生彩ある表現を以て第一要件とするのですし、又それが行文の主目的でなければならぬのです。要するに、私達が文章を書く場合には、趣味の爲か實用の爲か、趣味を先として實用を後にするか、或は實用を先として趣味を加へるか、先づその目的を考へて、それに應ずる心の準備をする事が肝要です。

### 例文と練習

#### 新緑の色

石川光春

①花誘ふ風に梢の春は散り、木の芽は伸びる。若葉は開く。陸續として息をもつかぬ發展振りに、山邊も野邊も忽にして新緑の粧ひ濃やかに、青柳は風になよ／＼軟風は頻に翠

②趣味を交へて色調の變化を説く。

③知識的の材料。以下實用文の手法。  
④比喩を用ひて知解を助ける

⑤實に簡潔にして鮮かな結びです。

鬢を弄ぶと云ふ景色。今迄黄に白に殊に赤や紫で、人の心は散々に動かされて来たが、此處新緑の色調で引きしめられ、轉じて靜平に歸する。

②はじめ若葉が開きたては、黄色が勝つて青味が淡く、所謂萌黄に染まつてゐるが、次第に青味が豊かになつて黄色が負けて行く。若し日光でも浴びやうものなら、何とも云へない鮮かな緑色が出て来て、落着いた明るい氣分が湧く。晩春の天地を彩るのは實に此の色であるが、これも一時の現象で、馳て季節が移れば遂には盛夏の深緑色に變り、綠蔭に靜寂な氣分を味ひ得る様になる。

③一體植物體が綠色を呈するのは、體中に無數の小粒を藏し、之に葉綠素と稱する綠色の物質が解け込んで居るが爲である。詰り綠色の微粒(之を葉綠粒と云ふ)が、數限り無く體中に存在して居るから綠色に見える事、恰も藍の粉末を水中に散らせば、水は藍色に彩られるのと同理である。ところが新芽や若葉では、はじめのうちは葉綠粒の數が少いし、粒も大抵小さいから、全體から見ると色が淡く見える。然し時を経るに従ひ、葉綠粒の數や大きさが次第に増加して行くから、萌黄から深緑色にと順次に變調を來するのである。若葉でも二枚重ねて日に透して見ると、其の邊の消息を理解する事が出来る。要するに新緑の色調は、葉綠粒の粗密大小の關係と人の感じとが交渉する處にある。



〔評〕 實用を先とし、之に趣味を交へた文章です。即ち、此の文の主目的は、新緑の色が、初め萌黄から、だん／＼と青味を加へて新緑に、新緑から深緑にと變調する所以を、植物學上から説く所にあるのです。そして、新緑の色が人に靜平な氣分を起させると云ふ事實から、これに聯關した趣味的の筆を交へて、讀者の共感を求めてゐるのです。趣味を交へた知識的の文章にありがちな弊は、實用の筆が趣味の筆に負かされ易いと云ふことです。世には、さうした例も尠くありません。しかるに此の文章では、あくまでも實用的、知識的の態度を動搖せしめる事なく、趣味は豊かであり、説く所は簡潔にして順序よく、その要點を盡してゐます。蓋し此の種の文章の好模範でせう。

### 三年生となつて

實用文練習の意味から、これは叔母さんでも、友人でも、兎に角自分と關係ある人に送る手紙の形にしますのです。三年生と云へば學校に於ける中堅です。學問

も躍進すれば身體も成育する。或る人は學科に對していろんな感想を抱くでせう。或る人は運動競技に對して特別な希望をよせるでせう。又或る人は現在の地位に様々の感興を湧かし未來に色々の憧憬をもつでせう。これらの心を明瞭に、相手に傳へるのです。

### 菜の花・豆の花

これを知識的に見れば、十字科の花と豆科との違ひがあり、これを感情的に見れば、菜の花は遠く眺め渡した廣し景色に美しさがあり、豆の花は葉蔭に恥らう可憐な姿に趣が多い。それ故、諸子は、知的材料はあくまで知的態度に、情的材料はあくまで情的態度に、その兩者を截然區別して別々の文を草して見るもよいでせうし、或は又例文の如く知情兩種の材料を胸の中に渾然と融合せしめて、これを實用文に表現して見るのも面白いでせう。



### 三 説 明 文

一、説明文とは 読者の理解力に訴へて、物事を説き、その真相を明かにする文章を説明文と云ふのです。前巻にも述べた通り、描寫文はあくまでも観る、——描くと云ふ態度です。それ故例へば鴉を眺めても、

野茶畑の中にあるはねつるべのてつべんに、一羽の小鴉が止まつてゐて、雪の降る空をじつと見上げてゐる。鴉はふだんの臆病と細心とに似合はず、すぐ近くに私が立つてゐるのに気がつかず、気がついてもそんな事には頓着してゐられないといった風に、一心になつてじつと雪の降る空の深みを見入つてゐます。

—(薄田泣菫)—

と云ふ風に、鴉の姿をそのままに描き出すのです。すなはち描寫文に於いては、對象によつて惹き起された感興の表現がその動機となつてゐるのであり、文章の制作そのものが主目的であつて、他人の批

判は問ふところでないのです。しかるに、鴉に就いて、

からすと云ふ名は、その鳴き聲から來たものらしい。「黒し」の轉だと言ふ人もあるが、どうであらう。燕雀類に屬する鳥で、稍、大形である。羽毛は通常黒色で光澤がある。昔から「鳥の濡羽色」と云ふ言葉もあるが、實際あの紺の光澤のまじつた黒羽色は美しいものである。嘴は強大で、その根基に剛い羽毛があつて鼻孔を蔽つてゐる。この鳥は鳴管を有せず、たゞ叫聲を發するだけである。

かう云ふ風に書けば、それは説明文です。すなはち説明文に於いては、常に知る——傳へると云ふ態度であつて、對象に關する知識なり感想なりを讀者の理解力に訴へて、説き知らしめると云ふのが、その制作の動機です。それ故文章そのものは手段であつて目的ではないのです。地理や歴史や理科などの教科書は勿論、修養上の訓誨和歌俳句等の評釋、毎日の學課の筆記、試験の答案、各種の辭典、或は實社會に於ける色々な解説報告の類、新聞雜誌の通信記事等は、大抵皆こ



の説明文によつてゐます。

二、**敘事文と説明文** 敘事文とは、事實を時間の経過のまゝに記述した文章を云ふのです。日記とか遠足の記とか、又、或る事件を書いたものとかは、皆この敘事文に屬するのです。それ故、今、時計の作られる順序に就いて説くのに、或る一つの時計が、或る日、或る工場で、或る職工によつて、かくくゝの順序で作られた、と云ふ風に述べると、敘事文になります。しかるに、その日時や場所や製作者などは問題にせず、その種の時計は、いつもこれくゝの順序で作られるものだ、と云ふ風に、一般的に説けば、それは説明文です。すなはち、同じ材料を、敘事文に於いては、特殊的、具體的に取扱ひ、説明文に於いては、一般的、抽象的に取扱ふのです。又、敘事文に於いては、作者の感情や想像を加へて、事物を觀察し、趣味ある筆を用ひて、面白く讀ませようとする事もあるのですが、説明文に於いては、あくまでも讀者の理解力に訴へ

ようとするのであつて、知識の傳達が第一義です。

三、**趣味と説明** ところが、作文などに於いては、とかく趣味と云ふものに捉はれて、いかに知識的なるべき説明の文章であらうとも、それに趣味の衣を着せなくては、立派な文章でないやうに思ふ傾向があるやうです。これは、文章の目的と云ふものに對して、はつきりとした考へを持つてゐない爲で、その誤つてゐる事は云ふまでもありません。

富士は駿河中斐兩國に跨る本邦第一の名山であつて、越後西部より伊豆七島に互つて本邦を横斷する一大火山脈の中央に在る死火山である。西は毛無山脈を以て限り、北は御坂山脈に接し、東は足柄山脈を界とし、南は愛鷹山を擁して駿河灣に臨む。形状端正、四望その景觀を等しうし、絶頂常に雪を戴く。盤周約四十里、海拔三七七八米、十三ヶ國より望む事が出来る。

かう云ふ文章にあつては、知識を傳へる事が主目的ですから、讀者の



感情に訴へるべき趣味とか美しさとか云ふ方面は、全く顧慮する必要がないのです。たゞ明瞭にその知識の要點を盡してゐさへすればそれでよいのです。しからば、説明文には絶対に趣味の筆を交へてはならぬかと云ふに、決してさうではないのです。例へば、

「今貸した提灯の火や草の露（几童）面白いことを云つたものである。客が歸ると云はれるので、此の邊は田舎道で危いからと云つて提灯を貸してあげた。客は禮を言つて去られた。草に一面に露が置いてゐる晩である。枝折戸に立つて見送つて見ると、今貸した提灯が草葉の露を照らし／＼段々小さくなつて行く。あはれな風情である。

—（沼波瓊音）—

かう云ふ俳句の評釋の如き、凡て趣味に關する説明には、趣味の筆を交へるのが普通です。時には知識の教授にも、

檜は固い木であるから、建築用材としても、その外種々の器具としても、その用途は極めて廣い。その立木である時でさへも、嶄然と風に抵抗してゐる姿は、腕つ節の強い魁偉な人物を思はせて、遠くからでも際立つてそれと知られる位である。

と云ふやうに、印象的な感想を加へて、その傳へんとするところを一層明確ならしめようとしたり、或は又、

兄は極めて勉強する方でしたが、友達などに對して、何でも「厭だ」と云へない性質でしたから、つひさそはれて勉強を怠ると云ふこともありません。試験前など、風呂から出て愈これからと云ふ時でさへ、友達が來て、伊原君、今から散歩に行かないか」と云ふときまつて、うんよし、行かう」と云ふ風でした。

と云ふやうに、描寫的手法を交へて、その對象を鮮かに解説しようとして試みる事も多いのです。しかしながら、こゝに注意すべきは、その何れにしても、説明文に於いては、あくまでも説き知らしめると云ふ態度で一貫する事です。そこに他の感想文なり敘事文なりとの相違が生ずるのです。特に、純粹の學問的實驗の記録に於いて、趣味の筆を加へる事は、ともすれば文意の明晰を害ひ易いものです。

四、説明文に關する注意 　それ故、説明文に關する注意は、たゞ明確



の一語に盡きると云つてよいのです。自分の心の中が、曇なき鏡に映し出されたかのやうに、明確に書き表されてこそ、説明文の目的は達せられたのであり、又さう云ふ文章をこそ、上乘の説明文と云ふのです。しかし、その明確を期する爲には、自らまた、次の諸點に考量を拂はなくてはならぬのです。

(イ) 内心の整理 心の中が整はないでゐて、それで明確な表現を望まうとしても、それは不可能です。この事は卷一に於いても縷説したところですが、説明文の場合、特に肝要な事です。それ故、私達は筆を下す前に、先づ説明すべき材料に就いて、明瞭精密な知識を得て置かねばなりません。自分にも曖昧な事柄を、他に對して明確に傳へ得る筈がないからです。次に、それら明瞭精密な思想を整理して、前後に秩序が立ち脈絡があり、事理一貫して少しも破綻の生じないやうにと心掛けねばならぬのです。

(ロ) 要領を得ること 説明文は概して抽象的であり、概括的ですから、要領よく事物の要點を示す事が必要です。徒に細密な敘述に流れたり、正確と云ふ一點にのみ走つては、却つて繁雜晦澁に陥り、事物の真相を掴む事がむづかしくなるものです。それ故、その中心目的から離れた事柄は、思ひ切つて省略し、説述の要點を明瞭にして、萬事にその要領を得ると云ふ事が大切です。

(ハ) 用語の選擇 凡て語句の曖昧は、文意の誤解を招くのが常です。就中、明確を第一要件とする説明文に於いては、殊に用語を嚴密にして、誇張的な語や、曖昧な語は絶対に避けなくてはならぬのです。それ故、場合によつては、先づ語句の意義を明かにしてかゝるとか、或は又類語や反對語や似て非なる語を照應せしめるとか云ふ様な手數をも取つて、明確な觀念を興へようとしなくてはならぬのです。例へば、私の所謂文明とは、主に精神的の發達進歩を意味す



るのである。とか「五月は、暖いけれども未だ暑いと云ふ程ではない。」とか「静かではあるが、決して寂しいと云ふ感じは與へない。」とか云つたり、或は「主觀を客觀に、先天的を後天的に、また「檢温器を「寒暖計」に「應用」を「利用」に比較して説く如きがそれです。

(ニ)懇切委曲といふこと　こゝに懇切委曲と言ふのは、説述の要點に向つて周到な注意を拂ひ、委曲を盡して説明するの謂であつて、(ロ)の注意に述べたやうな、徒に細密な敘述を並べたてる事ではないのです。必要に應じて或は圖解し、或は寫眞や繪を挿み、或は實例なり、比喩なりを設けて説述するなど、凡そ理解を助け、印象を鮮かにする所以の努力に向つては、少しもその勞を惜しまぬと云ふ態度が、かう云ふ知識の傳達を主眼とする文章に於いては、特に必要です。

五、説明文の種類　説明文の種類は、前にも述べたやうに、千差萬別

であつて、實用文中最も範圍の廣いものですが、凡そこれを別つて、次の三種とする事が出来ます。

(イ)物を説くもの　動植物の説明、器具機械の解説、物理化學の諸現象に關する證明、語句文章の註釋など、凡そ物に屬する範圍の説明はいづれもこの部類に屬するのです。實例の提舉、寫眞、圖解の利用などは、この種の文章に於いては殊に必要です。

(ロ)事を説くもの　新聞の報道、歴史の記述、逸話、傳記などの紹介、或は事件の経過報告など、時間上の説明はすべてこの部類に屬します。正確にして要領を得ると云ふことが、かう云ふ場合、殊に必要です。

(ハ)理を説くもの　「女性の修養に就いて」とか或は「平和主義に就いて」とか或は「至誠と成功に就いて」とか、凡そ道理に對する説明は皆これに屬するのです。思慮をひそめて、前後秩序あり、理路整然と



筆を進めると云ふことが、此の種の文章に於いて特に必要です。

### 例文と練習

#### 小品文

大町桂月

①この一段は、要領を得た説明。平明簡潔

相手と云ふものを考へた説明。相手を見て法を説くと云ふ諺もある如く、相手相應な説明も場合によつては必要です。②小品文に上達する方法について。③所謂三多の法

①小品文とは、短い文章と云ふ事である。文章を區別して見ると、敘事文、敘情文、議論文、書翰文等になるが、小品文は、敘事、敘情、議論の何れに限らず、短いものを指したもので、人によつて、その長い短いの程度も違つてゐるが、茲では短い文章と言ふ意味にとれば宜い。②そして、この小品文を書くには、どうしたなら上手になれるかと云ふに、一體文章は、畫や字と違つて、他人の書いたものをそのまゝ真似る譯に行かないから、習ふにも面倒である。従つて、文章作法だけの文章講話だのと云ふ書物を読んだ所で、それで直ぐ文章が書けるものではない。然らば文章を書くには、どう云ふ風にすれば宜いかと云ふに、それは書物を読んで思想をこしらへた上で、自分でも多く作つて、自然とその法を悟ると云ふ事になるが、そんな事を云つてゐるは、學問の浅い思想の黽い人には、文章は書けないと云ふ事になる。従つて、文章を稽古しようとする人も無くなる。其處で私が考へるには、少しも文章の事

③先づ多作から

④次に商量多。

⑤文章の秘訣。

を知らない人が、文章の稽古をする一番はじめは、昔の思出、自分でやつた事、眼の前に見た事、人から聞いた事、なんでも宜いから、それを友達か何人かに話して聞かせる積りで漢字を知らねば、假名ばかりでも、好い話を紙へ書くと思つて、そろ／＼書いてみる。それが即ち文章である。そして、それが宜い文章であるか、悪い文章であるかは、出来上つた上で見返して見て、話が順序よく書けてゐるか、思つた事が皆書けてゐるか、何人に話しても、分る様に書けてゐるかといふ事を考へた上で、話が順序よく書け、思つた事が書け、他人に分るやうに書けてゐるなら、夫は宜い文章である。

⑥併し順序よく書け、思つた事が書け、他人に分るやうに書けてゐるにしても、その言ひ方が下手であつて、短く言つて分る事を長たらしく言つたり、重く力を入れて言ふべき事を軽く言つたり、精しく言ふべき事を簡単に言つたり、まはりくどく言つたり、ぞんざいに書いたりしてあつては、宜い文章とは云へない。短く言ふべくして短く言ひ、重く言ふべくして重く言ひ、精しく言ふべくして精しく言ふのが、文章の秘訣である。

#### 〔評〕

作文入門の極意を極めて平易にはつきりと、讀者の腦裡に印象せしめるところ、流石に老大家の筆です。説明文に於いては、このやうに、たゞ教へんとする所を、明瞭に表すことにのみ心をを用ひればよいの



です。平易な筆ですら〜と澁滞なく述べられてゐる點、要領よく次から次へと筆を進めて行く點學ぶべき所が多いでせう。

### 鳥の嘴

丘 淺 次 郎

①これが此の説明文の主眼點以下實例の簡潔な提擧です

①鳥類の嘴は、おの／＼食物の種類に應じて形の違ふもので、穀粒を拾ふ雀は太く、蟲を食ふ鶯は細く、魚をついばむかは、せみは甚だ長く、蚊をすくふよたかは頗る短く、きつゝきは真直で、あゝむは曲つて居ることは人の知る通りであるが、同じ仲間の鳥で、ほとんど一種毎に嘴の形の違ふのは、アメリカ熱帯地方に産する蜂鳥である。

②比喻を交へて蜂鳥の嘴の特色を説く。

③この鳥は鳥の中で最も小形のもので、雀より遙かに小さく、拇指の一節にも足らぬが、恰も昆蟲類の蝶や蛾と同じ様に常に花の蜜を吸うて生きて居る。大概孔雀の尾のやうな色と光澤とを持つて居るから、その飛び廻つて居る所は、さながら寶玉を散らしたやうに美しい。蝶や蛾が花の蜜を吸ふには、おの／＼専門があつて、筒の長い花に來るものは、吻が長く、淺い花に來るものは、吻が短いが、蜂鳥もこれと同様で、花の形狀に應じて長い真直な嘴を持つた種類もあれば、著しく曲つた嘴を具へた種類もあつて、丁度、錠と鑿の様相手が定つてゐる。

④簡潔な描寫を用ひて、いすかの嘴の特色を叙す。

鳥の嘴には、随分不思議な形のものがある。いすかの嘴の上下相交叉してゐることは、誰も知つてゐるが、これはいすかに取つては都合がよい。いすかが松の實を食ふところを見るに、足で掴んで、嘴を鱗片の間にさし入れ、一つ頭を振つたかと思ふと、その奥にある松の種子は既にいすかの口に移つてゐる。雀や山雀のやうな真直な嘴では到底このやうに速には取れない。

〔評〕 鳥類の嘴は、食物の種類に應じてその形を異にする所以——全く知識的材料——を説明するのに、或は短い比喻を加へ、或は簡潔な描寫を交へて、委曲を盡した趣味的の説明文です。殊に蜂鳥やいすかの嘴の特色を説明するあたり、豊かな趣味の筆を振ひつゝも、その趣味が、趣味の爲の趣味ではなく、説明を十分に活かす爲の手法だと分れば、此の例文を以て、此の種の文章の好模範だと云つても、決して過言ではないでせう。

### 郷里の地勢

これはいづれかと云へば知識的に取扱ふべき題材でせうが、そこに印象的な説



明を加へたり、地圖を利用したり、断面圖を示したりしたならば、一層明確な文章が得られるに違ひありません。

## 日本の國

日本の國に就いて、知識的材料を取扱つた文章は、地理に歴史に修身に國語に、殆ど枚擧に違ない程接したことせう。同時に又若き日本の氣力を歌ひ、或は島國の美しさを讚美した情的文章にも多く接した事せう。しかし諸子は、今、知的材料を選び、知的態度の下に文を草して見るのです。情的材料を交へても差支はないが、それとても根本の態度はどこまでも説き知らしめると云ふ事でなくてはなりません。

## 混合と化合

純然たる知的態度を以て取扱はねばならぬ題材です。それ故美しく書かうなどと云ふ成心をつかり去つて、たゞ一途にはつきり分るやうにとのみ心掛けねばなりません。その爲に或は實例を擧げ或は比喩的の説明によつて、了解を

助け語義を明瞭ならしめようとする努力は必要でせう。兎に角、要領よく、この二つの異同を説明して、その科學上に於ける意義を明確にするのが目的です。

## 四 聯想の働き

一、觀察と聯想 生き生きとした情趣をもつ表現を得んが爲には、聯想力や想像力が豊かでないけません。その聯想は、觀察が土臺になるのですから、先づ觀察に就いて少し述べて置きませう。觀察には、(一)外面觀察(二)内面觀察(三)特殊觀察の三種があります。その中、外面觀察に就いては、今更説明する必要もないでせう。今、薄田泣菫氏の「野菜畑の朝中」にその例を求めると、

竹垣に添うて鳳仙花が咲いてゐます。鳥の形をした花の盃には一杯に露が溢れてゐます。合掌したやうな此の花の實に一寸でも觸ると殻は爆ぜ割れて、その機みの中



から種子が躍り出すのもおもしろいと思ひます。

これは外面観察です。ところが、

この頃咲く花の中で、姿がすつきりしてゐて、心持の深いのは桔梗の花です。この花の拵へは、いかにも手の冴えた名人の頭の中で出来上つたやうに、形の簡素なうちに、花の生命が張りきつて躍動してゐるのが、飽かず見入られます。何といふ氣品の高い花でせう。この花の前に立つと、ダリアの艶美を極めた姿などは、却つて氣恥しくなる位のものです。それを思ふにつけて、私は自分の家の紋章が、この桔梗の花であるのを喜ばないではゐられません。

と云ふ風に、單にその外形的な方面のみに止まらず、そのものゝ内面にひそむ氣分や特徴を見て取るとか、或はそのものに直接關係のある事柄を考へるとかすれば、それは内面観察です。薄田氏の文章はこれに引き續いて、

紋章といへば、國や家や都市や、また學校などで紋章が選ばれて決まるまでには、それぞれおもしろい由來話があるものです。アメリカの紋章には……。

と云ふ風に、それからそれへと、桔梗の花に直接的な關係のないことにまで考へ及ぼしてゐるのですが、これは特殊観察です。このやうなものゝ外面から更に内面にまで觀入して行く注意深さや、汎くいろくゝに觀察の眼を向ける心の鋭さが、やがて聯想力を養ふのです。それから又、私達は、こゝに掲げた薄田氏のどの觀察に於いても、奔放自在な聯想の働きが、いかにその觀察に深い情趣を與へてゐるか、と云ふ事に注意せねばなりません。聯想の活躍は、その觀察をして愈深からしめ、愈趣あらしめるものです。

二、描寫と聯想　しかし「觀ると云ふ心持は、とりもなほさず描く」と

云ふ心持です。それ故、觀察に伴ふ聯想は、そのまゝ描寫の中に織り込まれなくてはなりません。「蒲團着て寝たる姿や東山」(嵐雪)の句の生命が、聯想の面白さにあることは云ふまでもないでせう。「夏草やつはものどもが夢の跡」(芭蕉)莽々たる夏草の茂みは、古城の懐古に



よつて、益、その趣が深くなるのです。すなはち、描寫は聯想を對比せしめることによつて、鮮かにその生彩を發揮するものです。「いかにも手の冴えた名人の頭のなかで出來上つたやうに」といふ新味ある聯想の對比が、いかに「形の簡素なうちに花の生命が張りきつて躍動してゐる」梧梗の姿を生動せしめてゐるかを思はねばなりません。前卷に於いて、感想の敘述が描寫を助けると云つたのも、かう云ふ點をさすのであつて、聯想の對比は實に描寫の足らざるを補ひ、趣を豊かにする最も良い方法です。

三、聯想の種類 聯想には、同類聯想、反對聯想、近接聯想などの種類があることは、前卷にも述べた通りです。すなはち、聯想の中で最も簡單なものが同類聯想であつて、夏の雲を見て大入道の姿を思ひ浮かべ、富士に白扇を思ひ、落葉に人の運命を考へ合はせるなど、すべて心の中に、何等かの明かな類似點をもつたものを同時に想ひ泛べる

のです。後に説く比喻法の根據は主としてこゝにあるのです。

私は此の頃、夕方になると、裏つゞきの空地へ出かけて行つて、草のなかに兩足を投げ出したまゝ、時間を過ごすことがよくあります。昨日もさうしました。西の方を見ますと、支那繻子の肌ざりはりを思はせるやうな靜かな空に、テエブル掛の布に染み込んだ茶碗の糸底の痕のやうな三日月が、ぼうつとにじんできました。

—薄田泣菫—

これなど、實に巧妙な同類聯想の表現です。ところが、白と黒、大と小の如く、その意味の相反するために造られた聯想は、これを反對聯想と呼ぶのです。例へば、

あの花椿の色は、だゞの赤ではない。眼を覺ます程の派手やかさの奥に、云ふに云はれぬ沈んだ調子を持つてゐる。悄然として萎れる雨中の梨花には、だゞ憐れな感じがする。冷やかな艶なる月下の海棠には、だゞ愛らしい氣持がある。椿の沈んでゐるのは全く違ふ。黒ずんだ毒氣のある、恐ろしい味を帯びた調子である。

—夏目漱石—

これなどは反對聯想の著しい例であつて、梨花や海棠の對比によつて、一層椿に對する氣分を濃厚にせしめ得てゐるのです。ところが



から云ふ風に、その事その物に對して、同類とか反對とか云ふ心持ではなく、筆を見て紙を喚想する如く、たゞそれに聯關し近接して起る聯想もあるのです。これが即ち近接聯想です。

向ふの聖が嶽も、この頃よく霞んで見える。炭焼の煙までが、殊に濃く白く深んで来たやうな氣がする。これから箱根の双子山には白い綿帽子のやうな雲がかゝるであらう。野火の煙も、山火事の明りも、閑雅ないゝ風致を見せてくれるに違ひない。

〔北原白秋〕

梅もいつしか盛りを過ぎ、日毎に春めいて行く聖が嶽の姿や炭焼の煙を眺めた時、双子山、野火、山火事、と近接繼起した聯想の敘述が、いかに早春の氣分を深めてゐるか、又作者の春待つ心を、どれほど切實に表現し得てゐるか、十分玩味すべき點です。

四、縦横無礙の聯想 聯想が作文の上に於いて、いかに重要な役目をなしてゐるか、と云ふ事は、以上で明かになつたでせう。縦横無礙

の聯想は、讀者をして端倪に違あらざらしめるばかりでなく、觀察はこれによつて愈深く、描寫はこれによつて益趣を加へるのです。清新といひ、簡潔といひ、奇警といひ、明快といひ、さうした筆致はいづれも聯想の働きに負ふところが多いのです。天馬空を行く如き才藻は、半ばその天稟にもよるのですが、多くは修練によつて得たものです。それ故、私達は、前卷にも述べたやうに、讀書、聽講、思索、考案等の經驗を積んで、縦横自在に聯想を馳驅せしめ得る人とならなくてはなりません。

### 例文と練習

#### 新緑の頃の雨

南部 修太郎

私は新緑の頃を、わけても、みづみづしい青葉若葉を濡らし乍ら、音もなく降りそゞぐ新緑の頃の雨を好む。またその頃は、どうかすると、二日三日と風が続いて、机や書棚には白

①以下、新緑の頃の雨を思ふと之に近接續起して來る聯想——近接聯想です。



③これも近接聯想です。

④反對聯想です

い埃が積み、縁や畳はざらつき、身體中が妙によごれつぼくなつたやうな氣がして、仕事も手に附かず、變に苛立たしい氣持で、時を過しあぐむこともあるが、その風が鎮まり、朝から何となく暗い空もよひだつたが、午後になつて、ぼんやり机に向つてゐる時などに、いつとはなく絹絲のやうな雨が降り始めてゐることがある。そんな時分に、窓の外を振り返つて、埃に白く乾いてゐた瓦屋根がつや／＼と光り、庭の楓や、椿や、八つ手などが、葉面のよごれを拭はれたやうに、新鮮な明るい緑を匂はせるのに、氣が附く時、私はどんなに生き生きと蘇つたやうな感じにされる事だらう。

⑤そこには、夕立のやうなあわたゞしさも無く、時雨のやうな愁はしさも無く、まして冬の雨のやうな冷たさや痛痛しさも無い。にほやかに底光るとでも云ふやうなすが／＼しさ、快い落ち著き、それが新緑の頃の雨の感じである。

〔評〕 作者は、先づ「私は……新緑の頃の雨を好む」と云ふ、自分の感想の全體の輪廓を初に出して置いて、それから其の感じの内容を、生き／＼した聯想を働かせつゝ、細かに書いて行つたのです。此の文章に見る様な聯想は、實際の生き／＼した經驗がなくては、決して湧くものでは

ありません。聯想の表現には、能くその作者の修養の程度が窺はれるものです。縦横自在に聯想を驅使せんが爲には、廣く深く修養を積み経験を累ねなくてはならぬのです。

### 若葉の雨

諸子には諸子でまた自ら南部氏とは別種の感想があり、聯想が湧くでせう。聯想を縦横に馳せて、若葉の雨に對するとき、きつと情趣の深い文章が得られるでせう。

### 四君子

梅竹、蘭菊を草花の四君子と云ふのです。その姿、その香、その性が君子人に聯想されるからです。しかしこれは支那に於ける傳統的な賞翫です。我が日本の我が現代人に於いては、又自ら異つた聯想を伴ふでせう。既成の四君子を評するも可、また新しく四君子を創成するも可。要は聯想の飛躍と觀察の鋭さを尊びたいのです。





古 城 址

## 廢墟に立ちて

廢墟に立つての感慨は、實に深いものです。古城の址に佇んで、懷舊の情に耽るもよく、廢屋のほとりにさ迷つて、人生の變轉に思ひを馳せるもよい。諸子の清  
新な聯想を期待したいものです。

## 五 想像の世界

### 一、創造の新天地 芭蕉の句に、

さゞれ蟹足這ひ上る清水哉

といふのがあります。繰返し誦んでゐるうちに、私達の頭の中には、「涼しい森蔭かどこかの、きれいな清水に足を浸してゐると、可憐な小蟹が足へ這ひ上つて來た」といふ、閑寂そのものとても言ひたいやうな情景が、ありくと現れて來るでせう。更に、その可憐な小蟹を、



つと無心に眺めてゐる芭蕉の旅姿までが目の前に浮き出て來るでせう。なほ一步進んでは、自分自身がその芭蕉ではないかとさへ思はれて來るでせう。その境地が想像の世界です。しかも、此の生々とした新しい境地は、もはや言葉や文字の上に働いてゐる想像世界の範圍を出て、全く自ら開拓して得た創造の新天地です。

**二、創造の喜び** 私達の心を大きくし、淨化し、燃え上らせるものは、決して私達の眼で見、耳で聞き、手で觸れる事の出來る現實世界のみのではないのです。想像の世界に遊び、潑刺たる創造の喜びを味ひ得ない人は、到底生き／＼とその心を成長させて行く事は出來ないと、言つてもよいのです。想像を根なしごと、輕視してはなりません。想像によつて慰められ、理想を胸に描いて愉しむことは、私達の常に經驗するところです。難儀な登山も、頂上の見晴しを思ふと、勇氣が出るし、苦しい仕事も、完成の喜びを考へると、元氣がつくでせう。若



し、人の世に想像といふものが無かつたならばそれはいかに無味乾燥な所となつて了ふでせう。想像は實に人生の轍の油です。子供に於いては、凡ゆるものが生命をもち、大人よりも常に物の真相に近い見方をするといふのも、彼等の心が純粹で無邪氣であると同時に、その想像力の豊富で、自由で、新鮮であるがためです。

三、想像の表現　それ故、私達が想像の世界を見つめて、それを文章に表して見ると云ふことは、作文練習の上に必要であるばかりでなく、想像力の涵養に役立つことにもなるのです。昔噺や色々の物語に表れて来る世界を描いて見るのもよいでせう。詩や歌や俳句や繪を主材として、それによつて心に浮ぶ景情を描寫するのもよいでせう。或は又、自分で開いた創造の新天地を表現して見るのもよいでせう。絶妙な表現の手法は、多く、此の想像の力によるのですから、私達は常に、これが錬磨を怠つてはなりません。

例 文

夜 露

舷橋をのぼらんとして、てのひらに

しつとりと夜露をにぎりたるかな (土岐哀果)

夜の港の歌である。港には大小幾多の汽船帆船が碇泊してゐたであらう。それ等の船々には赤や青のさまざまの記號燈がかゝげられてあつたに違ひない。それらの船々の間を漕ぎ廻る小さな舟の櫓の音や、呼び交す舟子どもの濁聲や、またはヒタヒタと眞黒にうねる波の音が其處らに起つてゐたに違ひない。それらの間に浮んでゐる或る一つの大きな汽船それはこれから自分の乗つて行くべき昭和丸である。その汽船に乗り移らうとして通船から欄干に手をかけた。するとどうであらう。そのブリツヂの欄干には、しつとりと夜露が下りてゐたといふのであらう。そしてその階段に手をかけた刹那の、旅馴れぬ人の心が、この歌の意であらう。

〔評〕　これは土岐哀果氏の歌を、若山牧水氏が精緻な想像力を働かせ乍ら、その歌意を味つた文章です。歌はれてゐる心持や四邊の情景に、

① 創造の天地。この情景は最早なる空想とは云へませぬ。それは生き／＼と私達に迫つて来る情景です。想像は架空的であるといふ點では空想や妄想に似てゐるのですが、それらよりも、もつと自然性があり眞實性があるもので、然實際を離れたで、妄想はあり、妄想は一層病的になつたものです。



更に牧水氏自身の豊かな想像が働き、思ひ出が結びつき、この歌の生命に逼つてゐるのです。かうして生命に逼つた想像の世界は、最早單なる想像境ではなくして、牧水氏が自ら開拓して得た創造の新天地です。創造の新天地とは、自然性を持ち眞實性を具へた想像の世界を云ふのです。

## 六 昔噺を精しい文章に

一、話の筋と想像の世界 昔噺で語るところは、多くはたゞ話の筋です。その筋を聞きながら、自分もその場に居るやうな楽しさを感じずるのは、私達が自分で描いた想像の世界に遊ぶからです。

昔々お爺さんとお婆さんがありました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。

これだけの話の筋を聞きながら私達は、山間の粗末な小屋に遊び、やさしいお爺さんに伴はれて山へ柴刈りに、親切なお婆さんについて清い川邊に洗濯に下り立つのです。さうしてその間に涌く一種の懐しい感情を、此の二人の上に寄せるのです。

二、創造の世界を描くこと かうして頭の中に描かれた世界は、自ら開拓して得た創造の境です。だから、これを表現するに當つては、名狀し難い興味の涌くものです。

山の緑をとかしたかとも思はれるやうな冷たい水が、ピチャ／＼と兩岸に戯れながら、ゆるやかに流れてゆく上には、お晝近い日の光が、箭のやうに、繁みを通して、點々と明るい斑紋を描いてゐた。お婆さんの髪の上にも、その光線の一つが、白い光を投げつけてゐるが、そんな事には頓着なしに、踝まで水に浸して、セッセと白い布を洗つてゐた。

といふ風に、私達の想像力は、どこまでも精しく、その場の情景を描き出す事が出來ます。かくて無限に境は開け、事件は進んで、簡単な話



の筋を骨とし、これに豊かな想像の肉づけをして、創造の世界に表現を興へる事が出来るのです。

三、統一といふこと 想像が縦横に駆け廻れば駆け廻る程、その間に統一といふことが必要となつて來ます。統一といふのは、昨日の事件と今日の事件との間に關聯のあることです。昨日の場所と今日の場所との間に連絡があることです。例へば、桃を拾つて歸つた家が粗末で、桃太郎の出發する家が立派なやうなことがあつてはならぬといふことです。始めから終りまで、あくまでも自然に調和してゐなければならぬといふ事です。時や所や物事の、前後左右、辻褃の合ふことです。

### 例文と練習

#### 鬼が島

① 濱邊には一軒の家もありません。青々とした松が、二様にうねつた木肌を見せて、際限もなく續いてゐました。昨夜の時化を忘れたかのやうに、今出たばかりの朝日が薄靄を透して、ホツカリと横合から照し出しますと、まづ汀から靄は霽れて次第に藍色をした海が現れて來ます。風もありません。波もありません。たゞノタリノとたゞようた末が、足もとに押寄せてザザババと夢のやうな音を立て、碎けるだけです。

桃太郎は汀に立つて、キツと沖合を見つめてゐました。するとどうでせう。今、薄絹をはぐ様に次第に晴れてゆく海面に、まぎれもなく、青い貝をふせた様な美しい島が現れて來たのです。

「おゝ、見えます、見えます。あれこそ鬼が島に違ひありません。かう叫んで、犬も猿も雉も勇み立ちました。

しかし、幾ら探して見ましても、舟のある筈はありません。これには、流石の桃太郎も途方にくれて、暫くはぼんやりしてゐましたが、その間に何處をどう探したのか例のすばしい雉子が一艘の立派な舟を用意して來ました。

② 島は一面にこんもりした樹で蔽はれてゐます。その樹と樹との間に頑丈な黒い扉が

① 濱邊の景色は作者の創造した天地です。  
② こゝを朝にしたのも作者の想像です。

③ いつでも桃太郎の勇ましい性質を頭に置いて書かねばなりません。  
④ 前に「青い貝をふせた様な」と云つた形容と照應した敘景。  
⑤ 創造の天地。



前の「ゆふべの時化を忘れたかのやう」とある句と一致。

うねりと續いて所々に重さうな鐵の扉がガツシリとはまつてゐます。正門は西の方に突き出した絶壁の上にあります。開けるときにはその音が十里四方に響き渡るといふ鐵の大扉の前にはいつも一疋の鬼が天地四方を睨まへてゐるのです。しかし今朝はゆふべの嵐で疲れ切つた鬼共がまだ正體なしに門扉の前に眠つてゐるではありませんか。桃太郎は何の造作もなしに此の二疋を縛り上げてしまひました。

〔評〕 海濱をこのやうに穩かにするのも、或はまた、大浪の騒ぐ荒磯にするのも、それは作者の自由です。青い貝のやうな島の形、十里四方に鳴り轟く頑丈な門扉、いづれも作者の想像によつて生れた姿です。

### 浦島太郎

浪靜かな入江、龜の背に乗つての旅籠宮城の善美を盡した生活など、最も逞しい想像の材料となるでせう。

### 猿蟹合戦

意地が悪くてするい猿、温良な蟹の性格は、この事件について想像を逞しうする

につれて、到る處でその特色を發揮するでせう。そして遂に仇討するまでの徑路を描いて、讀者をして、いかにも猿をにくみ、蟹に同情する心を惹き起さしめるならば成功です。

### 郷里に傳はる昔噺

素盞鳴尊の大蛇退治、因幡の白兔、天女の羽衣等は、我が國に古くから傳はつてゐる國民的の昔噺です。古い歴史をもつ國には必ず、かうした數々の興趣の深い傳説があるものです。皆さんの地方々々にも、いろんな昔噺が残つてゐるでせう。それを材料にして、趣味豊かな讀物を書上げて見なさい。

## 七 韻文を散文に

一、韻文の評釋 韻文の評釋は、前にも述べたやうに、説明文の一種です。従つて、その手法も、あくまで説明の態度を離れません。すな



はち明瞭。正確に自己の見解を表すことが、その第一要義です。

めん鶏ら砂あびるたれひつそりと剃刀研人は過ぎゆきにけり

幾羽かの牝鶏が砂をあびてゐた。その傍を剃刀研人が足音も立てぬやうに、ひつそりと過ぎて行つたと云ふだけであるが、この歌には一種の神祕めいた不安らしい暗示がある。夏の眞晝此の歌には七月二十三日と云ふ題がついてゐる(の寂寥とも云はるべき気分が歌いつばいに流れてゐる。「ひつそりと」と云ふ第三句は、いかにも剃刀研人の感じをよく表してゐる。今云つた夏の眞晝の寂寥といふ気分や一種神祕めいた不安らしい暗示といふのは、此の句あるが爲に一層強められてゐる。又「めん鶏ら砂あびるたれ」と先づ強く讀者に一種の感動を與へて置いて、ひつそりと剃刀研人は過ぎゆきにけりと云ふやうに靜的な表現がしてある。

〔前田夕暮〕

これは前田夕暮氏が諸家の短歌を評釋せられた中の一節です。短歌を鑑賞してその情趣を解説し、その表現の手法を批判せられたものであつて、平易暢達な文章を以て、能くその見解を説かれてゐます。明確を旨とする評釋の態度も、これによつて窺ふことが出来るでせう。

二、韻文の情景描寫 韻文の含む情趣は、またこれを解説する代りに、描寫の形で表現する事も出来るのです。例へば、

雑店の灯を引くころや春の雨

蕪村

花曇りの空は暮れるにつれて次第に暗くなつた。どこに一つ星の影さへ見せず、低く垂れ下つた雲は、立ち並ぶ雑店の明るい光にどす黒く仰がれた。が、そんな空模様には頓着ないかのやうに、宵の口から出盛つた人達は、ひつきりなしに雑店の前を流れた。どの店もかなり忙しかつた。しかし夜も漸くふけて、客足も跡絶え勝ちになると、ガランとした店さきが急に淋しくなつて來た。どの家も、申し合せたやうに、店をしまひ始める。いつの間に降り出したのか、軒下をクツキリと描き出す程に音もなく、やはらかい春雨が、あたりを濡らしてゐた。

と云ふ風に、その環境の中に自らを置きながら周囲の情景を描き出すのです。それ故、前の評釋を客觀的な態度と見るならば、これは主觀的な態度であり、前者を主知的な説明と見るならば、後者は主情的



な描寫です。

三、主想を敷衍すること 韻文を散文に表現しようとする場合には、先づその韻文を反復熟讀して、その主想をしつかり捉へ、その場面をはつきりと認めて、出来るだけそれを鮮明に表現すると云ふ事が肝要です。單に、その韻文の言葉を逐つて書き下したゞけのものには、何の價值もないのです。しかし、主想をしつかり捉へる爲には、よほど透徹した鑑賞眼をもつてゐなくてはなりません。そこに此の仕事のむつかしさもあれば、面白さもあるわけです。「草の葉を落つるより飛ぶ螢かな」芭蕉これは螢が葉の端へ行つてポツと落ちたかと思ふより早く、直ぐに弧を描いて飛んで行つた様子です。即ち光の「動の趣致」が、その主想をなしてゐるのです。しかるに、「星月夜一つも星の飛ばぬ哉」字想この句を味つて見ると、前とは全く反對の情趣すなはち光の「不動の趣致」が、その主想をなしてゐる事が分ります。

夜は沈々と更けて、空には星屑が靜かに瞬いてゐる。いつまで見てゐても星は更に飛ばない。その不動の間に漲る一種の淋しみが、この句の生命です。かう云ふ、生命に觸れた鑑賞——主想の把住には、先づ心を句境——歌はれてゐる心境や、その時の四邊の景情——の中に沈めて、作者の呼吸を呼吸し、作者の心を心とする態度にならなければならぬのです。一讀して直ぐ分るやうな言葉の上の意味あひを以て、直ちに其の歌の意味だと早合點してはなりません。詩歌と云ふものは、極めて印象的な、暗示的なものです。言葉の上の事柄の裏面に、或は其の事柄から聯想される心持に、本當の意味のある場合が多いのです。かくて味ひ得たる情趣は、自分の豊かな想像にまかせて、果てしなく敷衍しつゝ、或は評釋に、或は描寫に、これを表現するのです。

例文と練習



短歌評釋

(一) たんぼぼ

若山 牧水

廢れたる園に踏みいらたんぼぼの白きを踏めば春たけにける

① 何といふ上品な美しい歌であらう。

② つとある庭園に足を踏みいれると、そこら一面たんぼぼが咲亂れてゐる。その花を踏みつゝ立つてゐると、嗚呼、もう春も暮れるのだといふ、暮春の感じが油然として胸の底から湧上つて來るといふのである。

③ まことに言葉に一分のたるみもない。「踏みいらなどといふのも決して不用意に使はれたものではない。單に「入りゆきなどといふのでなく「踏みいら」とあるので、其の時の作者の心が何かしら興奮して、いらいらしてゐたらしく感ぜられる。「白きを踏めば春たけにける」といふのでも、そのやゝ硬い古風な言ひかたの中に、言ひ知れぬ緊張と、しいんとした氣持とが含まれてゐるではないか。

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑の黄なる月の出

先づ感激の辻  
リを書きつけ  
たのです。  
① 主想の把住。  
作者と同じ境  
地に入り、作  
者の呼吸を呼  
吸し、作者の  
心を心とした  
態度より生れ  
た評釋。  
② 生命に觸れた  
鋭い解剖。

④ 情景描寫の手  
法を用ひた説  
明。生命に觸  
れた鑑賞。

⑤ 短評。

⑥ 表現手法に對  
する批評です

④ 畑には青い幹と葉を思ふさま生ひ伸ばして、蜀黍が高々と茂り合つてゐる。夏の初  
の靜かな夕方で、その葉先にはもう露でも宿りさうだ。折しも月はこの廣漠たる平原の  
はての低い空に、漸く黄な色を鮮かにして照りそめようとしてゐる。其處に一人の少年  
が佇んでゐる。手足の細い、色の青白い病兒である。晝間からたつた一人で、しきりに細  
々とハモニカを吹鳴らしてゐたのであつたが、もう夜にならうとするのに、一向氣もつか  
ぬげに、猶しんみりと幼い單調な樂器を唇頭から離さうともしないといふ、絃景の歌。同  
じことでも、たつぷりと新味を湛へて歌つてある。

石がけに子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕焼小焼

⑥ 夕焼小焼は、よく子供たちが夕焼のした時に唄ふ歌である。それをそのまま持つて來  
てゐるのだが、それがいかにもよく調和してゐて、わざとらしくないばかりか、その句があ  
るために、夕焼小焼のした海邊の崖に、多くの子供が一心になつて魚を釣つてゐる景色が、  
はつきり水の滴るやうに歌ひ出されてゐる。

(二) 椿

三木 羅風



①情景描寫。印象的な表現で

②主想の描寫。靜的な感興。

③最後に力強く賞讃の辭が投げられてゐます。

④情景描寫。

⑤こゝが主想を活かした處です。

⑥短評ながら鋭い。

椿の蔭をんな音なく來りけり白き布團を乾しにけるかな

①日はしづかに燃えてゐる。

椿の木が一本、いつばいに赤い花をつけて立つてゐる。その椿の木蔭から眼のひろい唇の赤い、島の女がひつそりとやつて來た。そして兩手にかゝへてゐた白い布團を日向にひろげた。太陽は一時にはつととしたやうに、その布團の上に光をふりそゝいだが、やがて靜かに靜かに、初めのやうに椿の木の上空で燃えてゐる。あたりは時の流れが澁んだやうにしづかである。

③心憎いほどしづかに落ついた表現がしてある。

○ 眞白なる布團の上に只ひとつ椿の花のこぼれて久しき

④日光を思ひきり吸収して脹れあがつた白い布團の上に、赤い大きな椿が唯一つホタリと音をたて、落ちた儘いつまでたつても、じつとして唯赤く光つてゐる。いつまでも布團に日があかるくあたり、いつまでも白い布團の上の椿は赤い。

⑥第五句「こぼれて久しき」は下凡には捉へられぬ巧みさがある。

○

夕寒き芒がなかに入りて行くおのが姿の黝くもあるか

⑦芒は枯れて白金の如く、寒い夕べの光のなかにしんとしてゐる。そのなかに入つて行く自分の姿を黝くもあるかと強く感じ、そして強くあらはしてゐる。白と黒との調和、光と陰との交叉が巧みに刻み出されてゐる。

〔評〕

(一)の三首は、北原白秋氏の短歌、それを若山牧水氏が評釋せられたものです。こゝに選ばれた六首の短歌は、この兩氏の解説によつて、遺憾なくその趣致を發揮し、その生命を躍動せしめてゐます。兩氏の、夫々作中の情趣に潜入し浸透してゐる態度——官能を鋭敏にして、凡ゆる趣致を見逃すまいとする度ましい鑑賞的態度の前に、自づと頭が下りま

⑦評釋の手法。主想の解説。

俳句評釋

(一) 椿落ちて

荻原井泉水



芭蕉の句を對  
比せしめた事  
によつて、此  
の評釋は一層  
深いものとな  
つてゐます。  
以下鋭い批判

③ 主想の解説。

④ 用語の玩味。

椿落ちてきのふの雨をこぼしけり  
芭蕉に「落ちざまに水こぼしけり花椿」といふ句がある。芭蕉のは其の哀な美しさを見ただけだが、蕪村のは「きのふの雨」と興じて、其の小さな猪口のやうな花に雨がたまつたまつ晴上つてゐた、春の朝のすがすがしい感じを巧みに生かしてゐる。此の二つを比べると、蕪村の方が確かにうまい。然し、かうした技巧がもし單なる技巧ばかりのものになつて、即ち理智的になつて、自然味を失ふならば危険である。例へば「青空や椿が落すよべの雨」といふ風になると、月並になる。かうした月並の深淵をすぐ下に見て、そこに落ちずに、巧みに踊つてゐるやうな處に、蕪村の作風が見える。

○ 若葉して水白く麥黄ばみたり

水彩畫のやうな句であるが、やはり繪ではなく詩であるといふのは、若葉と水と麥とが緑・白・黄と眼に訴へる美感を主としてゐるのではなく、木々は若葉になつて行く、麥は黄ばんで行くといふ生命の現れを作者は感じてゐるからである。「若葉して」「黄ばみたり」等の言葉は其の感じを表してゐると見るべきである。

⑤ 主想の把住。

⑥ 表現手法の解剖。生命に觸れた鑑賞。

① 説明。

② 句評適切。  
③ 追憶。

④ 主想に密接な聯關をもつ感想の思ひ出。

稚兒の寺なつかしむ銀杏かな

⑤ 銀杏の葉が黄ばんで、其の黄金のやうな美しい葉が地上一ぱいに散敷く頃、其の葉を拾ひにといふよりも、お寺の庭の廣い、しつとりとした土に心を引かれて、幼兒達が寺へ遊びに来る。「寺なつかしむ」といふ言葉の齎す感じが、秋も深い朗かな日のおつとりとして淋しく、ほかほかとして潤ひのある心持を傳へてゐる。そして「銀杏かな」といひ据ゑた言葉の調子が、天空に突立つ大きな銀杏の一樹の姿を其のまゝに寫してゐる。

(二) 歸

花

沼波瓊音

春の夜の夢見て咲くや歸花

千代女

① 小春の頃、暖かな日影に欺されて、梅櫻などの咲くことがある。これを歸花歸咲といふ。これを春の夜の夢でも見て、思はず咲いたのであらうかといつたのである。この句は或は理窟らしくも聞えるけれども、面白い想像である。女らしい想像である。② 自分が歸花の面白さに感じたのは、數年前鎌倉へ行つて頼朝の墓邊を歩いた時である。こゝは風が當らず、日は暖かで、梅が所々歸咲をして居る。頼朝の墓は前に高い。果敢ないやうな面して悠然としたやうな心持が今でも忘れられない。場所も場所であつたが、あの時ほど



描寫體の説明  
巧に句の情景  
を描く。

句評適切。  
俳句の特長を  
説明し、間接  
に抱一の句の  
傑れてゐる所  
以を説いたの  
です。

盛んに歸咲した景色を見たことは無い。

星一つ残して落つる花火かな 抱一

よく花火にある光景で、バツと天に朱の柳條を描いて、それが粉のふるひ落ちるやうになつて段々下に消えて行く。それに初め開いた空高く柳の中心に生れた、唯一點の銀の星がしばらく消えずに残つて居る。さう云ふ光景である。川開きか何かの光景、橋上の人舟の提灯など、或は鳴物の音、人の聲などを寫して、其の一部にこの花火のかう云ふ様を描いてあるなら、川開きそのものゝ光景は明らかに顯はれるかも知れないが、星一つ残して落つる花火の色、光は、この句ほど強くは人の頭に映らぬ。この強みは、他の一切を寫さず、たゞ花火のその光景のみを寫した爲に出てるのである。句は短いから、斯くの如く純一になるのである。純一なるが故に強くなり、この星の如き實際に對する如く眼前に燦として輝くのである。この純一の強みと云ふ事も、俳句の短いが爲の一つの効果である。

〔評〕 (一)の三句は蕪村の句で、それを荻原井泉水氏が評釋したのであり、(二)は千代女抱一の句を沼波瓊音氏が評釋したものです。何れも、先

づ句の含む情景を味得して、その主想を説いてゐます。そして又、句法の妥當さとか緊密さとか純一さとか云つた表現の批判に移つてゐます。これは評釋としての最も普通な形ですが、私達は荻原氏に於いては、特にその批判の備敏さに沼波氏に於いては、その説明の懇切にして委曲を盡す態度に、學ぶべきものゝ極めて多きを感じるのです。

### 俳句の情景描寫

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮 芭蕉

一しきり真赤に空を染めてゐた夕榮の色が次第に消えて、向うの山なみがだんだん薄鼠色にぼかされてゆく。と、山と山との間から吐き出された煙のやうな夕霧が遠まきに森をつゝみ、人家を包んで、靜かにこちらへせまつて来る。そこらはひっそりと靜まりかへつて、木の葉一つも動かない。かうして大自然は晩秋の夜の深い眠りに入るのだ。じいつと夢のやうなあたりの景色を眺めてゐると、ふと目の前に黒いものが、すうツと飛んで來てとまつた。あ、鳥が柿の枝にとまつたのだ。鳥はだまつてゐる。柿の枝は少しゆれたが、またもとの位置にかへつた。夕暮の色は刻々に深くなつて来る。(鑑賞讀本)



〔評〕 これは芭蕉の名句から得た秋の夕暮の情景を描いたものです。自己を空しうして句境に没入し、その間に漂ふ情趣をいかにも深く味得してゐます。この場合に於ける想像上の景色は、想像には違ひないが、鑑賞者の單なる氣隨氣儘の想像ではないのです。句の情趣の中に自ら浮んで來る自然の景色です。これを此の句の餘韻と云つてもよろしい。又或る意味に於いては鑑賞者の創造の世界です。此の文章はいかにもよくその創造の新天地を描いて、その中に名句の生命を躍動せしめてゐます。

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

(春道列樹)

幽邃閑寂な情景が髣髴として眼前に浮んで來ます。これを評釋風に説述するもよく描寫體に寫し出すもよい。

冬鴉くろく大きく麥畑の上に影ひき飛び去りにけり

(前田夕暮)

かう云ふ光景は寧ろ描寫體に寫し出すと興味が深いでせう。しかしその表現の手法を解剖して見るのも亦面白いでせう。

青き實の蔭に椅子よせ春の日を友と惜しめば薄雲の行く(北原白秋)

逝く春を惜しむ——諸子にもその追憶はあるでせう。この歌の主想を把住しつつ、自己の創造の世界を文にして見ることです。

わが事と泥鰯の逃げし根芹かな (丈 艸)

描寫を交へて評釋して見ると面白いものが出來ませう。

世の中は三日見ぬまに櫻かな (藝 太)

句としての價值は兎に角として世に廣く知られてゐる作品です。俗には「三日見ぬ間」と傳へてゐますが、比較して評釋して見なさい。

土に描いて遊ぶ子に夕日なほ残る (井泉水)

情景を描寫して見るのです。



## 八個性と類性

一、個性と特徴 文章上で個性と云ふのは、常に人間の性格のみに就いて云ふ言葉ではないのです。犬や猫でも、二匹集まればそれぞれ個性によつて行動してゐることが観察されます。石にも個性があります。草にも個性があります。凡そ天地間に有りとならぬものは、いづれも皆他と違つたそのもの特有の質、氣分、性格——すなはち、個性を有つてゐるのです。そして此の特殊な質、氣分、性格を對象とする見方——所謂個性的な見方によつてのみ、始めてその物の真相に觸れて深く觀、正しく味ひ、鮮かに描くことが出来るのです。

船長ボージュールはお道化た小形の男で、始終海上で轉がされて居るところから體が丸つこくなつてゐた。體ばかりでなく、その心までが、磯邊の小石のやうに、丸く角が磨り取られたらしく見えた。咽喉をゴロゴロ云はせて悦に入つてゐたが、はやくから人生

を此の上もないものと見て、どんな事件が起つても、諾々と快く受け入れて行くといふ男であつた。

—(モウパッサン)—

その人物を表し、その性情を示すに最も大切な事は、その個性の觀察表現にあると云ふ事が、かう云ふ文を読んで見るとよく分るでせう。

大きな瓣は卵色に豊かな波を打つて、夢からこぼれるやうに口を開けたまゝ、びつそりと所々に静まり返つてゐる。香は薄い日光に吸はれて、二間の空氣の裡に消えて行く。

—(夏目漱石)—

これは豊麗な薔薇の個性を盡した鮮かな表現です。

鹿は牝鹿が多い。草の上に腹這つてゐるのは大抵顔の日の方へ向けまぶしさうに眼を細めて、口をもぐもぐさせてゐる。立つてゐるのはその涙ぐんだ大きな黒い柔かな眼を、じつとさせて物を考へぬでもない様子をしてゐる。或は絶えず何物にか驚いてゐるやうにも見える。人が行くと逃げるでもない逃げないといふ態度で寄つて来る。

—(島村抱月)—

これは個性的に細かく觀察した牝鹿の描寫です。



眞○黑○な○塔○影○は○長○く○大○地○の○面○に○倒○れ○て○思○ひ○か○け○す○も○そ○の○影○に○は○い○つ○來○た○の○か○三○正○の○鹿○  
が○ま○る○で○石○像○の○や○う○に○耳○一○つ○動○か○さ○な○い○で○じ○つ○と○し○て○臥○し○て○ゐ○る○。——〔長田幹彦〕

これは月影が水の如く流れてゐる静寂の氣分を最も印象的に描いたものです。是等の例によつても分るやうに、個性はその場その場に於ける物の特徴に現れるものです。しかし、物の特徴は、——例へば晝間見た鹿の特徴は、決して夜の鹿の個性となつて現れるとは限らないのです。それ故概念的に得た特徴を以て、いつでもその物の個性を現してゐると考へてはなりません。一切の成心を去り、感覺を鋭敏に働かせつゝ、深く觀、よく味ひ得てこそ、始めて、特徴は際立つて見え、個性は生命を以て逼るのです。

二、個性と類性 總ての物は、それ〴〵の個性を有つてゐると同時に、またその種類に共通した性質、すなはち一定の型をも有つてゐるのです。鳥は翼をもつて翔り、魚は鱗をもつて泳ぐ。これらの事は、

その種類通有の性質であつて、文章上に於いては、これを類性又は類型と呼んでゐるのです。朝起きる、顔を洗ふ、食事をする、學校に出掛ける。かう云ふ事も學生生活に於ける類性です。類性は誰でも既に心得てゐる事が多いのですから作文に於いては、大抵の場合、書くだけ無益です。事物の類性にのみ注意して、個性を見逃してゐる見方を概念的な見方と云ふのです。概念的な見方では、千篇一律、何等清新な印象もなく、何等感激に値する興趣をも見出し得ないので、

三、印象的な觀察 或る事象に就いて、私達の腦裡に深い印象となつて強く刻み込まれてゐるものは、必ずその事象の特徴に現れた個性の閃きです。私達はこれまで、深い印象を文章に表すやうに學んで來たのですが、これからは更に進んで、凡ゆるものを印象的に觀ると云ふ習慣を養はなくてはなりません。草でも木でも人でも家でも、それらが皆個性をもつて、くつきりと浮き出て見えると云ふ風に、



眼を養ふことが大切です。ふと暮れ方に月の影を認めても、それが、  
丁度今、聖堂の森を離れた月の色が、いやに赤い。洪水が漲つて、暴風雨の來る徴かと思  
はれるやうに赤い。

—(田山花袋)—

と云ふやうに、強く印象に残り、或は又、おなじ沼の静けさを感じたの  
でも、それが、

蘭のつんく。生えてゐるその尖頭に黒いヤンマが留つてゐて、その羽に日影の當つて  
ゐるのが、何とも言へず沼の静けさを私に思はせた。

—(田山花袋)—

と云ふ風にはつきりその時その場の個性が受け取れるやうになつ  
て來てこそ、觀察は一段の躍進を遂げるのです。

四、簡潔と冗漫 個性だけを觀個性だけを寫す描寫は、簡潔で力强  
いけれども、類性までも描くと、却つて文は冗漫に流れて、迫力が乏し  
くなるのです。大和田建樹氏の言葉にも、

文章は簡潔にして、意味に不足なきを貴ぶなり。かの徒らに長くつゞけて、不用の文

字多きは宜しきを得たるものにあらず。されば、夜も更けぬ。月ものぼりぬ。とのみ言  
ひてすむべき處にも、寝てあかすらむ人さへぞ憂きと言ひけむ秋の夜も更けぬ。鏡を  
かけたらむやうなる月も空にすみのぼりぬ。と厭ふべき詞を添へて飾り立つるは決し  
てあるまじきことと知るべし。

とありますが、全く文章は簡潔にして、意味に不足なきを貴ぶのであ  
つて、細かな觀察はよいけれども、それはあくまでも個性に向つての  
細かな觀察でなくてはならぬのです。かくてこそ私達の描寫文は、  
次第に概念的な敘述から、個性的な描寫へ、平板な記事から、印象的な  
表現へ、冗漫から簡潔への道を辿つて、次第に洗練せられて行くので  
す。

### 例文と練習

#### 渡り鳥

薄田泣菫

渡り鳥の初客といつたら、——さやうさ、まづ鴟とでも云つて置かう。——  
秋の彼岸が



⑧ 鶉の姿や鳴聲から受けた感じですが、この感想が自ら鶉の個性を傳へる事に成功してゐます。  
 ⑨ 入神の妙筆です。この聯想が鶉の個性を盡して餘蘊がない。  
 ⑩ 鶉の個性を描いた絶妙の筆以上の敘述によつて私達の心の中には鶉が如何なる気分を私達に與へるかゞ感得出来る。その氣分で此處の部分を読んで行けば鶉の個性が一層明瞭になるでせう。  
 ⑪ 四十雀の個性この洗練され

過ぎて、そろ／＼日影が黄色がかつて来ようといふ頃、私達はどうかすると暖い日の午過ぎ、そこらの木立で甲高い鋭い聲を聞くことがある。あゝもう秋だなと思はず振返つて見ると、矮小な櫟に交つて、づぬけて背のひよる高い檜の木に鶉が一羽止まつて黄色な夕日を受けて、羽莖が金のやうにきら／＼してゐるのが見える。私達は、その瞬間、いはうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覚える。  
 鶉の次には鶉が来る。山家の午過ぎ、懶さうな蟋蟀の聲もいつの間にか鳴き止んで、枯葉一つ寝返りを打つ音までがはつきりと耳に入る。静けさの底に、どこからともなく、微かな聲が洩れて来て、何の音とも分らない。すると、木蔭の葦畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐる農夫が、ひよいと顔を擧げる。拍子にすぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身を反らして、逃げて往つて了ふ。それが鶉だ。鶉といつたら、まるで悲哀でも抱いてゐる人のやうに、大抵は連にはぐれて、たゞ一羽で来る。そして、そこらの小枝に止まるなり、ひよくひよくりと軽いお辭儀をして、囁くやうな聲で唄ひ出す。  
 鶉が来てから、もの十日も経たぬ中に、また四十雀が来る。この鳥は鶉と違つて、十羽も二十羽も群を組んで来る。山から里へ移る時などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そして、そこらの木立におりるなり、眩しいほどす

た表現の手法を深く味ふこと。

⑦ この聯想の敘述が又鶉の氣分(個性)を私達に傳へるのですが、鶉と比較して見なさい。その妙筆に一層驚嘆させられるでせう。  
 ⑧ 鶉のところと比較して見なさい。

⑨ 頬白の個性。殊に雨に濡れた頬白の描寫は印象的ですが、諸子の地方では又自ら變つた言傳へがあ

ばしこく、蝶蛸おほぢかたむしなどを啄き廻しながら、鼠色の背を反らし、柔かみのある胸の圓みを見せて、銀の鈴を振るやうな透徹つた聲で、早口にしゃべり續ける。  
 小雪がちらつく頃になると、鶉あそびが来る。これは鶉と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりとあたりを忍ぶやうにして来る。初冬の午過ぎ、山近い田舎の小家で、爺は炬燵に潜り込んで、こくり／＼と居眠りをする。その側で、婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐に吊した干菜の影が見すぼらしく映つて、時折ちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして、絲目が切れて、眠さうな紡錘の音が、ぱつたり止むと、そ／＼と掛菜をむしる音が、するが、老人の耳には、そんな音の聴取れよう管がない。婆さんは俯いたまゝ、絲を紡ぎに掛かる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい／＼と小刻みに籬を傳つて隣から隣へと、狭苦しい物蔭を出たりはひつたりして、移つて行く。  
 鶉あそびと後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頬白が、灰色の胸までびしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止まつてゐるのを見ると、私の國では、この鳥の鳴聲を説いて、  
 ⑩ 二筆啓上仕る。子供泣かすな、火の用心。今度の便りに金十兩やりたいたいけれど、一文



るでせう。此の文の氣分と雨に濡れた頬の姿と、如何に似つかはしいか。又その事が如何によく頬白の個性を傳へてゐるか。

も御座なく候]

と言傳へられてゐるのを思ひ出す。

〔評〕 鶉鷓四十雀鷓鷓頬白、これら渡り鳥たちの個性を描いた文章です。勿論この文章は、それらの小鳥を眼前に見て寫生した文章ではありません。この小さな旅人たちの淋しい姿をしみじみとした氣持で胸に浮べ乍ら書いた文章です。しかし、かう云ふ名文が單なる想像や一片の回想で出來ると考へたら大變な間違ひです。そこには精緻にして鋭い觀察眼がなければなりません。そこには個性に對する鋭くて深い觀入力が必要です。例へばこの鶉や鷓鷓や頬白の表現手法を御覽なさい。そこに聯想された情景とその小鳥の私達に與へる印象や氣分とは、何と云ふ微妙な融合を見せてゐる事です。餘程深くその小鳥の個性に潜入し得た人でなければ書けない文章です。

初

夏

春の花よりも初夏の緑を愛する人があるものです。秋の靜寂な氣分よりも初夏の潑刺たる氣分を喜ぶ人があるものです。しかし初夏を單に輝かしい天地潑刺たる氣分とのみ見るのは既に概念的な見方です。心を空しうして眺めたならば青葉の戦ぎにも却つて寂寥を感じる場合があるかも知れないのです。純粹な個性をのみ味ふことです。

送春の譜

春の個性が次第に失はれて行く。そこに送春と云ふ感じも湧き、惜春と云ふ感じも起る。さうした心と、消え行く個性との交渉を表現することです。

洋傘と人

人の個性に應じて洋傘の種類とその持ち方まで、それら異なるものだと云つた人があります。停車場停留場などでよく觀察して見なさい。きつと面白い文章が書けるでせう。



## 九 餘韻といふこと

一、餘韻とは 江戸時代の詩人、廣瀬淡窗がその父から聞いたといふ話に、

ある人が次のやうな海鼠なまこの句を作つて師匠に見せた。

板いたじきに下女取落す海鼠かな

師匠はつく／＼と見て、「良よいけれども、これでは餘あまり道具どうぐが多おほ過ぎる。もう一度考へ直ただしなさい。」と云つた。そこで次の様に改めた。

板いたじきに取り落したる海鼠かな

師匠はこれを見て、「すつとよくなつたが、まだ十分ではない。」と評した。しかしその人は、もうこれ以上直す事が出来ない」と云つた。すると師匠は、

取り落し取り落したる海鼠かな

と書き改めて示した。

と云ふのがありますが、この「道具が多過ぎる」と云つたのは、味ふべき

言葉です。場所は板敷、人は下女と、すべてを言ひ盡して了つては、讀者の受ける感銘は、その作者の説明の範囲内に局限されて了ひます。精密に過ぎ、明白に過ぎる敘述は、讀者に想像の餘地を與へません。それ故、人を削り、更に場所をも去つて、その場面の急所のみ捉へて之を端的に「取り落し取り落したる海鼠かな」とする時、始めて含蓄も深くなり、海鼠の面目も躍如たる句となるのです。すなはち、この語り盡ことごとさぬ味、語るべくして語り餘あました味を餘韻と呼び、餘情と云ふのです。名畫や傑れた彫刻などに接した場合でも、私達の感興は、それらが表してゐる以上に深い遙かなところに導き入れられるものです。これが、それ等の作品に、深い遙かなひびき——餘韻がこもつてゐるからであつて、凡そいかなる藝術に於いても、この餘韻と云ふものが最も大切なものとされるのです。

二、想像力の刺戟 ひとり文藝のみならず、凡ゆる藝術に於いて、餘



韻を。残す。所以は。畢竟。讀者の。想像力を。刺戟せんが爲です。僅かに一部分を示して、その大部分を讀者の想像にゆだねると云ふ手法——例へば「今夜は海鳴りが聞える。星が長く影を曳いて飛んだ」とのみ云つて、海濱の静寂、満天に星屑のこぼれてゐる情景を想像せしめる手法は、最も印象的で力強いのです。勿論、私達の觀察が深くなれば深くなるほど、事物の複雑な姿が目にとまるものですが、それらを細大漏らさず説き盡し描き盡すと云ふ事は、殆ど不可能なばかりでなく、たとひ可能としても、さやうな表現は、徒に冗漫に流れ、却つて讀者の注意力を鈍らせ、文の情趣を殺ぐものです。

應接室には、壁に面して黒塗のピアノがあつた。ピアノの上には一輪ざしと小さな人形とがきちんと置かれてゐた。ピアノの横の臺には、かなり大きな花瓶に牡丹が美しくいけてあつた。東南の隅には蓄音器があつた。蓄音器の上には風景畫の大きな額が掛けてあつた。入口の扉の側には、美しい爐がきつてあつて、大理石のふちがつや

くと光つてゐた。真中のテーブルには銀製の灰皿があつた。テーブルの四方には、體をうづめさうにぶつくりした椅子があつた。上からさがつてゐたシャンデリヤも美しかつた。窓のカーテンも美しかつた。

かういふ文章には、何の餘情もなく、徒に讀者を倦ましめるだけですから、しかるにこれを、

豊かに備へ付けられた應接室の一隅には、深紅の牡丹が燃えるやうに薫つてゐた。テーブルの上の白銀の皿は、午後の日ざしをうけて、つやくと光つてゐた。

といふ風に簡約したならば、却つて鮮かにその場の情景を印象せしめることが出来ると共に、深い餘韻をも生ずるのです。

三餘韻を残す手法 文章に餘韻を残す爲には、なるべくその文章を簡潔にしなくてはならぬのです。文章を簡潔にするには、なるべく多くの事柄を、なるべく短い文章に盛らうとするのではなくして、單純な一二の事象を、なるべく印象的に描かうとすればよいのです。



それ故、照りつける強烈な日光は肩に痛く、海面の反射は目にまぶしく、砂丘のほてりは足に熱かつた」といふ様な表現は、決して簡潔とは云へないのです。「暑い砂濱の貝殻の光が、目に痛かつた」と云ふ様に単純な事柄を描いてこそ、文章も自ら簡潔に、餘情もまた生ずるのです。殊に詩歌に於いて最も重んずるのは、この餘韻餘情といふことです。すが餘韻にこもる心のひびきこそ、その詩歌の全生命をなすのです。

さゝ栗の柴に刈らるゝ小春かな

鬼貫

枯枝に鴉のとまりけり秋の暮

芭蕉

蕭條として石に日の入る枯野かな

蕪村

麓田の夕日に多き案山子かな

子規

鳩立つや霜に搔く藻の棹光り

碧梧桐

これらの俳句に於ける單純な描寫が、いかに豊かな餘韻をもつてゐ

るか、深く味つて見なくてはなりません。

#### 四、單純と複雑

このやうに、描くところの事象そのものは單純であつても、それに聯關した幾多複雑な姿をば、その餘韻に含めて表すことが出来るのです。一切の事象は、常にその周圍と關係を保ちつゝ現れてゐるものですから、或る一つの事象を抽出したならば、それ關係してゐる多くの事象は、ちやうど綱に引かれる投網の目のやうに次から次へと順々に現れて來るのです。すなはち、單純な事象を通じて、複雑な世界の展開を見ることが出来るのです。文藝の表現は、それでなくてはなりません。徳田秋聲氏は嘗て、

すぐれた描寫は單純を書いて、複雑をあらはしたものでなければならぬ。即ち單純といふことが藝術には最も必要だ。

と説かれたが、傾聴すべき箴言です。

しからばその單純な事象——描くべき單純な事象——複雑な背



景をもつた單純な事象と云ふのは、どんなものを選べばよいのかと云ふに、こゝに私達は再び個性と類性との問題を顧みなくてはなりません。すなはち、個性を選んで、類性を捨てると云ふ事です。私達は、觀察を深めれば深めるほど、複雑な種々の姿を見出すものです。けれども、それと共に、その個性をもはつきり捉へ得るものです。そして、個性の中でも、最も輝いてゐる個性、云はゞその事象に於ける急所と云ふものがある筈ですから、その急所を捉へて表現すればよいのです。前に引用した俳句なども、皆その場に於ける急所を捉へてゐます。觀察の眼を鋭く事象の特徴にそゝぎ、そこに磅礴する個性を擱んで、これを簡潔に描いて行くとき、必ずやそこには、より広い世界が開け、より多くの事象が浮かび出て、餘情は饒かになつて來るものです。

### 例文と練習

### 月下の富士登山

荻原井泉水

「おゝ、月が……私は覺えず馬上でかう叫んだ。それは、東の空に低く磨ぎすまされたまゝ、圓い光が玲瓏と搖ぎ出でた所だつた。月がさし出ると共に、景色の調子はすべて一變した。今まで一様に薄青かつた空や裾野は、くつきりとして光と影との二つに分れた。空は朗々とした光澤を帯びた。そしてお山はいよゝ、黒く大きな姿を以て現前した。その半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鑲められてゐた。それは石室の灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た。そして私達の七頭の馬が、長い黒い影を投げ初めた。

馬返しの茶屋に着いた時は、夜氣を感じる程だつた。これから山も高くなるし、夜も更けるからと強力が云ふので、私達はメリヤスの肌着を着込んだ。槽の明りの暗い手もとで、饅頭を一杯づゝ食べた。そして又自分々の馬に乗つた。「今夜はお山はいゝぞ。」こんな日和は今年になつて始めてだ。——馬子と茶屋の主人がかう話してゐた。

一合目から上は樹の繁りがある。月は大分高くなつたらしいが、枝がこんもりと冠さつてゐるので、路は暗かつた。先に立つて行く馬子が一人、提灯をつけて馬を曳いて行く。

④ 印象的な美しい表現。以下月前の光景は神韻縹渺。圓點の部分は特に味つて見なさい。

⑤ 光景躍如として現れる。



木下闇の印象  
的な個性描寫  
餘韻翳々。

④印象的な描寫  
鋭い觀察眼で  
す。

⑤このあたり全  
く彌望千里の  
月光に融け入  
つてゐる様な  
氣分です。

後の馬はたゞ先の馬に續いて暗い中を連れるのであつた。⑤勾配は段々に急になつた。それに岩や石が多いらしく、馬の蹄の音がカツカツと鋭く鳴つて來た。そして暗さの爲か、急な上りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には蹄鐵から火花が散つた。しかし樹の枝の薄くなつてゐる所では、月の光が雪のやうに葉の上に積みたまつて、そこらを明るくしてゐた。又ふつと繁みの杜絶えてゐる所では、月の光が瀧のやうに流れ落ちて路上に溢れてゐた。さう云ふ所を、馬は勇ましく歩を運んだ。

三合目、四合目の室は、もう戸を閉ぢてゐる前を、ひつそりと乗りながら過ぎた。そして五合目に着くと、馬は心得たやうにびたりと止つた。樹帯はこゝらまで、全く盡きて、月はお山一面に射し照つてゐた。私達は馬を下りた。④馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、おとなしく足を揃へてゐた。私達は、この室にはひつて、熱い茶をうまく味つた。そして用意して來た夕食の辨當を開いた。室には宿泊してゐる人が、蒲團一枚をひつかけて、ごろ／＼倒れてゐた。

五合目は、天地の境と稱せられてゐる。如何にもこのあたりまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。⑤吉田口から裾野を來る時、しつとり薄い夕霧が襲うて來るやうに思ふたが、夫はもや／＼とした白い雲となつて、こゝから見ると、低い裾野一面を蔽うてゐる。

其の彼方に吉田の町の灯がチカ／＼と塊まつてゐる。それより猶遠く幽かに見えるのが船津の灯であつた。

〔評〕 犀利な印象的な觀察眼は、いつもその場の真相に迫つてゐます。個々の事象を捉へて、これを的確に描寫して行く間に、より廣い世界が開け、より多くの事象が浮び出て、幽渺限りなき餘韻を曳いてゐるのも偶然ではありません。これ位、筋勁で、個性的で、印象的で、これ位餘韻の饒い文章も蓋し稀でせう。私達は熟讀玩味して、この美しい筆致のよつて來るところを味得せねばなりません。

### 山 寺

山寺の門をくゞつて、その閑寂に遊んだ事はありませんか。山寺とまでは行かずとも、近くの寺の廣庭に、銀杏の落葉を拾うた事はあるでせう。繩飛びをして遊んだ事はあるでせう。隠れん坊をして遊んだ事はあるでせう。しかし、今試みにかう云ふ文題を携へて、山寺の石磴を登り、菩提寺の庭に立つて、その幽寂の趣に觀入して見なさい。きつと餘韻のこもつた文章が出來るでせう。



墓

參

父母に連れられ或はたゞ一人で祖先の墓前に額づき、骨肉の靈前に祈つた事はあるでせう。その時の思ひ出深い印象の數々を、魂こめて簡潔に敘述するので

### 月下の宮居

月清き夜、神廟のほとりに佇んで、思ひを澄ました經驗はありませんか。神韻縹渺たる勾欄の前に樹間を洩れる月光の降りそゞぐ光景に眺め入つた事はありませんか。こゝでは、さうした場合の清澄冷徹な心地を見るもの聞くもの寄せて表現して見たいのです。

## 一〇 紀行 文

一旅の印象 吉田絃二郎氏は、その「修善寺行」の中で「旅だ！と思つ

ただけでも神経の端々までくつろいだやうな氣がする。久しい間見失はれてゐた本當の自分の姿が見出されたやうな快さや懐しさが喚びさまされて来る。」と言つてゐますが、かうした自由な感じと清新な氣分とは、旅に出た者の齊しく享ける快さです。平常は同じやうな生活に馴れて、反應力の鈍りきつてゐる身心も、旅に出ると、すっかりその單調から解放されて、筋肉は俄に力強く脈うち、神経は新しき興奮に顫へて、鮮かな感觸を味ふことが出来るのです。又、若山牧水氏は、その著「みなかみ紀行」の序文に於いて、

旅ほど好ましいものはない。斯うして旅に關して筆を執つてゐると、早やもう心のなかには其處等の山川草木のみづみづしい姿がはつきりと影を投げて來てゐるのである。折も折、いまは一年中で、落葉のころと共に私の最も好む若葉の季節で、峰から溪間、溪間から野原にかけて茂つてゐるであらう樹木たち、その間に啼きかはして遊んでゐるであらういろ／＼の鳥達のことを考へると、しみじみ胸の底が痛んで來る。



と言つてゐますが、それほど旅は心。躍。ら。せ。る。も。の。で。あ。り、そ。れ。ほ。ど。旅。の。印。象。は。強。い。も。の。で。す。旅に於いては今まで何の心も惹かれなかつた空の色山の形水の姿、さては小鳥や蟲や草木の類に至るまで、世上の森羅萬象が、甦つたやうな魅力をもつて私達に迫つて來るのです。

二、紀行文とは かう云ふ印象の鮮かな、感銘の深い旅の經驗を書いたものが、即ち紀行文です。それ故、紀行文の中には、見聞もあれば觀察もあり、感想もあれば想像や追憶もあるのです。そして上乘の紀行文とは、敘景ばかりでなく、旅に於けるその人自身の姿や心境まで、はつきり認め得られるやうに書いてあるものを云ふのです。例へば吉野山を訪ねたとして、若しそれが單なる敘景文となつたり、所謂案内記に終つたり、或は誰の紀行も同じやうな文となつたりしたのでは、紀行文としての價値は極めて乏しいと云はねばならぬので

す。そこには旅にある作者自身の個性的な姿がはつきりと現れてゐなければならぬのです。

汽船の中では十分に睡られなかつた。目が覺める度にコットンコットンと機關の音が聞えた。私に並んで寝てゐる男が、さも安らかさうに鼾を立てゝゐる聲が耳についた。陸地を遠く離れた大洋のたゞ中で、しん／＼と更けた眞夜中で、小さな船に身を托し乍ら夫々に夢を結んでゐる自分や、自分と同じ旅の人々が淋しく思はれた。昔の人が味つたやうな尊い孤獨な旅の心持、それは急行列車で往復するのに慣れては、到底觸れ得ない其の心持を、此の荒海の中の島への旅で、私は殊に船に弱い私は幾分か嘗められるやうに思つた。

— 萩原井泉水 —

これは萩原井泉水氏の「大島行の船」の冒頭の一節ですが、かう云ふ文章を読むと、紀行文に於いて、作者の個性の發揮といふことが、いかにその文章に深みを與へ、いかに強く讀者の心を撼かすものであるかが分る筈です。「名物を食ふが無筆の旅日記」と云ふ川柳があります。が、かう云ふことでは、折角旅をした甲斐がないと云はねばなりません。



ん。

三、紀行文の種類 紀行文は、旅と云ふ特殊の場合に於ける日記だと云つてよいでせう。日記に於いては、たゞ日々の個性を書くのが主眼でしたが、紀行文に於いては、旅と云ふ心持を以て、日々の印象的な経験を書くのです。それ故、紀行文は旅日記だと云つてもよい譯です。従つて、たとへ半日の遠足でも、これを旅心で書けば紀行文となるのですし、たとへ千里の旅に於ける日記でも、それが旅と云ふ心持で書かれなかつたなら、紀行文とは呼べないのです。

しかし、旅にも色々な種類があつて、その目的と、それに伴ふ旅の様子とが、その紀行文に様々な色彩を與へるのです。例へば、それが視察旅行ならば、自ら視察の收穫と感想とが、その紀行文の主要な部分を占めるでせうし、探勝旅行ならば自ら風光の描寫と感興の敘述とが、その紀行文の主旨をなすでせう。それがまた、礦物や植物などの

採集を目的とする採集旅行ならば、ずつと學術的な色彩を帯びて來るでせう。その他、修學旅行登山旅行寫生旅行など、その目的や行程によつて、それ〴〵特殊な觀察と興味とが、それらの紀行文に千態萬様の色彩を投ずるのです。

四、紀行文に關する注意 しかし、いかなる種類の紀行文に於いても、たゞ「何處そこへ行つた。何を見た。何を聞いた。」と云ふ風な、ひとわたりの敘事や單なる敘景にとゞめることなく、それらの事象に對する作者自身の心の動きを、生き〴〵と寫し出すと云ふことが肝要です。前に引用した荻原氏の文章など、その旅に於ける氏の風采が、鬚髯として現れてゐるばかりでなく、その中のどの部分を取つて見ても、氏の眞摯な心の姿を認める事が出来るのです。そこで尙二三、紀行文に關する注意を列記して見ませう。

(イ) 地方色といふこと 紀行文中、最も普通のものは、漫遊觀光の紀



行でせう。かう云ふ旅行に於いて、最も強く印象に残るものは、異境の風物の特異な色彩——即ち、地方色です。山國には山國獨特の色彩があり、海濱には海濱特有の色彩があります。それは、常に自然の景觀のみにとゞまらず、その地方の住居、風俗、人情、言語など、百般の生活現象にも現はれてゐるものです。それ故、こゝに地方色とは、自然の景觀は勿論、自然の中に營まれてゐる人生の諸相をも包括して云ふのです。この地方色が、その地を始めて踏む旅人に對して、どれ程深い印象を與へるか、は言ふまでもないこととせう。紀行文には、かうした印象を鮮かに書き表さなくてはならぬのです。

右岸の袂に瓦が堆く積上げてあつて、傍に一人の女がうづくまりながら竹籠を編んでゐる。左岸には一軒の露店があつて、何を賣つてゐるのかと思つたら、棚の上にタオルだの、たはしだの、ブラシだのが並んでゐるらしい。この邊はちよいとした村

になつてゐるのであらう。兩岸には茶館だの、肉屋だの、鍛冶屋だの、店が隙間もなく立並んでゐる。それ等の家は、一様に川の方を背中にして、後向きになつてゐるのだが、多くは運河の上へ張出しのヴェランダをこしらへ、水と家の關係がいかにも親み深く造られてゐる。水は家を浸さうとし、家は水に戯れようとしてゐるやうな感じがする。壁造りの家が、運河の中に直に浮いてゐるやうな感じをさへも與へるのである。

—(谷崎潤一郎)—

これは谷崎潤一郎氏が蘇州の運河を航行した時の紀行の一節ですが、兩岸に繰り出される水郷の風趣や、生活の姿、即ちその邊の地方色が、鮮かに描き出されてゐます。旅に於けるかうした印象は、旅するその人の心が純であれば、純である程、觀察眼が深ければ、深い程、清新であり、深刻です。旅行をしながら、この地方色を捉へ得ぬやうでは、旅行をした甲斐がないのみならず、また讀者としても、その鮮かな描出がなくては、興味を惹き起す筈がないのです。



(ロ) 材料の選擇 紀行文に於いては、特に材料の選擇と云ふことに注意せねばなりません。前にも述べたやうに、旅に於いては萬事萬端が印象深く感じられるものです。それらの全部を記述しようとする、徒に繁雜に流れるばかりで、中心點もなくなれば統一もつかなくなるでせう。それ故、私達は先づ主想をととのへてからねばならぬのです。その紀行の中心目的が探勝旅行か採集旅行か修學旅行か、いかなる旅行であるかによつて、文の主想が異なる筈です。先づこの主想を明瞭にし、これによつて、多くの材料の中から適當なもののみを選擇せねばならぬのです。勿論、挿話も場合によつては、文に生彩を與へ、主想の發展を強調するに役立つものですが、それが文の主想や話の本筋に調和し、或は關係あるものでない限り、挿入せぬ方がよいのです。

すぐ眼近に見えてゐる東寺の五重の塔を、模糊とした朝霧のたなびく中に、車窓か

ら振り返りながら、私は座席に落ち着いて、バスケットの中から折疊んだ地圖などを取り出して、披きながら、多年の宿望を果す今日の悦びを感じつゝ、靜かに探勝の氣分に浸つてゐた。伏見を通り越して、桃山・木幡・宇治も過ぎ、やがて奈良・平野の西の空に生駒の鬚鬚を望むところまで來てゐると思ふ間に、もう土佐派の繪に見るやうな眞青な嫩草山、それにつゞいて、蒼鬱とした春日山などが、車窓に映じて來た。大佛殿の大きな屋根の頂に輝く、鴟尾が眼を射た。

—(近松秋江)—

これは探勝紀行です。探勝的な氣分の眼に映ずる奈良の印象はこれではなくてはならぬでせう。

(ハ) 時と場所との關係 如何なる描寫に於いても、同じ事ですが、特に紀行文が一面日記の性質を帯びてをり、殊に印象の清新を以て生命とする以上、この時と場所との關係もつと詳しく云へば、季節と時刻と場所との關係が、はつきり分るやうに表現されると云ふ事が極めて大切です。高原地の夕景と海邊の夕景とでは自らそ



の趣を異にし、それらは、また季節によつても夫々特異な景觀を呈する筈です。その山、その川、その森、その社、その寺と、夫々その季節に於けるその時刻独自の情景が捉へられねばならぬのです。

まだ日は出てゐなかつた。何とも云へぬ微妙な宏大な傾斜を延いて、遙かに足柄の方に擴がつてゐる曠野は、まだ夜露に濡れたまゝであつた。そしてその端から端にかけて、あまねく吹き渡つてゐる冷たい風が、はつきり眼にも見え、心にも感じられた。殊に宿の眼下の窪地一帯に吹く朝風は、淺黄に枯れた玉蜀黍の葉から葉へあざやかな音を立て、枯葉にまじる桑の青葉の露の色は、ことさらに深く見えた。瞳をすゑてこの廣い景色に向つてゐると、遠く喇叭の響が聞え、汽車の喘ぎが聞える。見れば遙かな野末を御殿場へ急ぐ汽車の煙が、眞白く細く地に這うてゐる。

—(若山牧水)—

これは初秋の頃、富士の裾野を旅行した時の紀行の一節です。時と場所、地方色と作者の姿とがしつくり融け合つた、なんと云ふ懐しい情味をそゝる文章でせう。その清新な筆致、巧緻な描寫を深く味ふべきです。

(二) 印象の鮮かなうちに 紀行文は、新鮮な印象の横溢するを以てよしとするのです。それ故、紀行文を書く場合には、その旅に於ける第一印象を記述するやうに心掛けねばなりません。第一印象が最も鮮かで正直なものだからです。どんな美景でも人情でも慣れてしまへばその價值を減ずるのが常です。二三日位の旅行なら、歸つてから書くもよいでせう。しかし、それにしても、やはり旅先で、その處その時に應じて、簡単なノートを取つておくに如くはないのです。そしてそれを歸つてから更に整理すれば、自材料の取捨選擇も行はれて、却つて清新な紀行文を得る所以となるでせう。長途の旅行では、どうしてもその日その處で事情の許すかぎり詳しくノートを取つて置くべきです。長い間には印象も薄らぎ、事實をも忘れ易くなるものですから。



例文と練習

新島行

荻原井泉水

先づ時の表示  
③ 單なる敘事ではなくして、作者の心の姿を寫し出してあるのです。  
④ この地方色の挿話が、主想の展開を大いに強めてゐます。

④ ここで、もう一度書き出しの一段を讀み返して見なさい。  
⑤ 作者の姿。  
⑥ 地方色の一つ

波浮<sup>①</sup>に泊つた船の朝は爽かに晴れた。狭い甲板を何の用もないまゝにあちこちとしたりる人達は云ひ合はしたやうに天氣の話をしてゐた。げふは好きさうだ。いや後に西風になるぞといふやうな言葉に私の注意は引かれた。漁師らしい無智な顔付をした男の云ふ事が、豫言者の如き權威ある言葉として聞きなされた。註をするが、大島附近では、冬季強い西風が多く吹く。船では之を非常に嫌ふのだ。大島の首腦たる元村でも、此の船の行くべき新島の本村でも、皆西を向いてゐる濱なので、西風が吹く時は、浪が高く船が着けられないといふ事もある。目的地に着き乍ら客を揚げる事が出来ない。なほ風が止まなければ引返して来る事もあるさうだ。船の客同士の會話から、さう云ふ事實を聞かされるにつけて、私は不安を感じずにはゐられなかつたが、空は山の木の枝の一本一本が數へられる位よく澄んで、其の木の葉がそよ／＼と動いてゐる位の微風があるだけなので、なにか大丈夫だと私は自分の搖ぎ易い心持を自分で押さへてゐた。  
⑤ 二三度來た艇舟は、昨夜上陸して宿をとつた客達を戻した外に、此の港から新しく乗る

⑦ 波浮の港から利島までの海上。旅の心細さと云つたやうな氣持が行間に溢れてゐます。

⑧ この鮮かな地方色の描寫に注意。  
⑨ このあたり作者の旅心をよさく味つて見なさい。  
⑩ これも利島の地方色の一つです。

人々をも加へた。船は母の懷のやうな靜かな港を出た。出ると直ぐに、そこは潮の早い灘だつた。大きな浪の群は待つてゐたかのやうに、此の船を取圍んだ。船は浪に逆らはぬやうに、且つ行くべき方向に舵をしつかと定めて、進行を續けてゐるやうだつた。然し、進めば進む程海は潤くなつた。船といふ船は、どちらを見ても、此の船一つだけだつた。其の上、朝の間は微風と思つてゐた其の風は、日が高くなるにつれて段々と強くなつて來た。「すつかり西風になつた。誰の口からともない此の眩きが乗客の心を曇らした。私は酔はないやうにと思つて横になつてゐた。少し頭を擡げると、船房の硝子窓を通して青い水平線が見える。その水平線が激しく斜に搖れてゐる——。  
船は呻くやうに汽笛を鳴らした。——それは利島といふ島に着いた合圖だつた。客の一人が下りる支度をしてゐたが、迎への艇舟はなかく、來ないらしかつた。私は倒れないやうに擦足をしつゝ船房を出て見た。利島は目の前にあつたが、驚かれた事は、島といふのは圓錐形に屹立した枯草の山と岩礁とばかりで、一軒の家もなければ一人の人もそこには居ない事であつた。長い枯草は風に吹き散らされさうに靡き、岩礁は浪から碎かれる位に強く打たれてゐた。船ではなほしきりに汽笛を鳴らした。すると山の彼方から、二三人の男が笛で呼び出されたやうに出て來た。後から又一人二人が續いた。其



⑩ 簡単な言葉で  
すが、この一  
語がいかによ  
く作者の心の  
姿をも表して  
ゐるかを味ふ  
べきです。  
⑪ 以下、旅に於  
ける作者の姿  
云ひやうのな  
い淋しい懐し  
さの情が讀者  
の心に湧く。

の男が磯に下りると、そこに引揚げてあつた一艘の和船を卸し初めた。それで舳舟をす  
ると見える。然し此の浪の高さにどうして仕おほせるだらうか。私は見てゐるのが目  
まぐるしくて堪へられないやうになつて、船房にはひるや又横<sup>⑩</sup>になつた。  
私達の船は二時間許りも此處に泊つて何か手間どつてゐた後に、又コトン／＼と淋し  
く浪を切る音を立て始めた。身體に感ずる動搖はますます大きくなつた。私は途中の  
句などを推敲して見たが、頭の中までゆらり／＼とするやうで考が少しも纏まらなかつ  
た。雑誌を出して讀んだが、何となしに落付いて味へなかつた。けさから飲みも食ひも  
しなかつた。——いや、昨日の朝、岡田で牛乳を飲み、夕方差木地でFの知人の家に寄つて、  
餅を振舞はれただけで飯といふものは二日も口にしないのだが、不思議にも飢といふ感  
じは少しもなかつた。

船は又汽笛を吹いた。たうとう新島に着いたらしい。

〔評〕 伊豆七島の中の新島へ航行した時の紀行の一節です。大島の  
波浮港——そこから利島までの海上——利島——利島から新島まで  
の船中など、その所その時の地方色や心情が、いかにも切實に描き出さ

れてゐます。その地方色の描出には、その所にある思ひをさせられ、そ  
の旅心の描出には、云ひやうのない淋しさ懐しさの情を唆られるので  
す。蓋し紀行文としての好模範と云つてよいでせう。

### 汽車の旅

尾崎紅葉は嘗て、汽車に乗ると、まだ都を離れないのに、旅のあはれが分ると云ふ  
意味の事を書いてゐます。車窓にうつる風光の變化や、車内の情景など、旅とい  
ふ感じは、汽車の場合殊に深いものです。車窓に展開される眺めや、車内の觀察  
などは、慥かに紀行文のよい材料です。

### 船の旅

或は、舟行雜記と云つてもよろしい。今までに經驗した色々な舟行の記憶を辿  
つて、その片々たる思ひ出を集めて見るのです。なるべく印象の深い事象のみ  
を選び、地方色の特異な姿を含めて書く事です。

### 修學旅行記



これは誰しも一度は書く文題ですが、皮相な見聞の羅列に終らずに、よく地方の色彩を描くやうにすることです。そして修學旅行の目的によつては、觀察の對象が自ら異なる筈ですから、其の點にも注意が必要です。かう云ふ場合に、特色ある紀行文を草するだけの腕を磨かなくてはなりません。

## 一一 抽象と具象

一、抽象と具象 嬉しいとか悲しいとか、美しいとか醜いとか云ふ言葉によつて、私達は其の表す意味をば知る事が出来るけれども、或る形象を具へたものを想像する事は出来ません。しかし、三日月とか梅花とか、黒犬とか大根畑とか云ふ言葉を聞くと、直ぐにその姿を目の前に描き出す事が出来ます。前者を抽象的な言葉と云ひ、後者を具象的な言葉と云ふのです。同様に、

何事をなすにも共同に限る。人間の生活を見ても、動物の生活を見ても、共同生活を營んでゐるものは皆發達してゐる。我々は共同といふ事を忘れてはならない。と説くのは、抽象的な説明ですが、

ある夏の暑い日の事であつた。庭に澤山の蟻がうろついてゐる。かなり大きな毛蟲がその邊を這つてゐた。一匹の蟻がこれを見つけて、その横腹に噛みついた。蟲は驚いて暴れるが蟻は決して離さない。けれども大きい蟲に小さい蟻だから、毛蟲は急いで逃げようとする。その邊を二匹の蟻がうろついてゐた。この毛蟲を見つけると、前の蟻に加勢して、やたらに噛みついた。流石の毛蟲も次第に勢がなくなつて、到頭たふれて了つた。蟻は大喜びでこれを引張つて行かうとしたが、三匹ではとても引張れない。その中に二匹三匹と段々蟻の仲間がやつて来て、到頭穴の中へ引きすり込んで了つた。こんな例は澤山あるが、全く共同のおかげである。

といふのは具象的な説明です。私達は、抽象的に物を説く事は出来ませんが、抽象的に物を描く事は出来ません。描くと云ふことは、畢竟、具象的に示すことです。抽象は主として説明の手法であり、具象は



主として描寫の手法です。

二、具象と感動力　フエーヤーチャイルド氏は「抽象的な感情は、これを述べたところで、容易く讀者に同様な感じを喚び起さしめる事は出来ない。しかし具象的な描寫は、すぐにその情景を想像せしめて、それに伴ふ感情を刺戟し興奮せしめる事が出来る。」と説いてゐますが、味ふべき至言です。「何事をなすにも共同に限る。」とか「共同生活を營んでゐるものは皆發達してゐる。」とか云ふやうな、抽象的な敘述は、知識を傳へるには適當であつても、感情を起さしめる所以ではないのです。讀者に強い感動を與へようとするには、どうしても、蟻の共同生活を描寫した様に、具象的な敘述が必要です。難波の文豪近松門左衛門が、淨瑠璃の作法を説いて、

あはれをあはれなりといふ時は、含蓄の意無うして結局その情薄し。あはれなりと言はずして、ひとりあはれなるが肝要なり。例へば、松島などの風景にても、あゝよき

景かなと譽めたる時は、一言にてその景象が言ひ盡されて何の詮なし。その景の模様どもをよそながら數々いひ立つれば、よき景と云はずして、そのおもしろきがおのづから知らるゝことなり。

と云つたのや、又近代歌壇の第一人者たる故島木赤彦氏が、歌に寫生と云ふことの必要さを説いて、

感動の直接表現と云へば、嬉しいとか悲しいとか寂しいとか懐しいとか、所謂主觀的言語を以て表す事であると思ふ人が多いのでありますが、實際は多くさうでないのではありません。一體、悲しいとか嬉しいとか云ふ種類の詞は、各人個々の感情生活から抽象された詞でありまして、所謂感情の概念であります。概念は一般に通じて特殊なる個々にあてはまりません。我々の現したいものは、個々特殊なる感情生活でありますから、概念的言語を以て緊密に表現する事はむづかしいのであります。

と述べた言葉などは、いづれも具象的描寫に關して、一生の心血を注いで來た、その尊い體驗からにじみ出た金言と云はねばなりません。

三、具象的な描寫　これで、描寫の要訣も自ら明かになつたでせう。



すなはち、讀者に鮮明な印象を與へ、如實に感動を傳へんがためには、すべからく具象的な描寫をする事です。主觀的な言語を並べたり、抽象的な説明をするよりも、事象を常に具象的に觀察して、その印象し得たところを端的に表現することです。

石敷をまつすぐに、本堂の前に立つて見た。賽錢箱は、薄眼を開けて、狸寝入をしてゐるやうなうづくまり方だつた。

—(里見 淳)—

あゝ、この苦痛！ 自分はあたりの椅子、食卓、皿を打破らし、猛獸の如く荒れまはつてみたいと思つた。

—(永井荷風)—

空は藍色に澄んでゐる。陶器のそれを思はせるやうな静かで、新鮮な冷い藍色だ。

—(薄田泣菫)—

これ等は、いづれも巧妙な具象的描寫の適例です。かう云ふ例によつて、具象的な描寫とは、結局、官能に訴へた描寫の謂だと分る筈です。いかに楽しいとか苦しいとか書き連ねたところで、結局、それは抽象

的な説明であり、主觀語の羅列に過ぎません。讀者をして本當に楽しく、或は苦しく感ぜしめようとするならば、その楽しいと感じ、苦しむと思つた時の實情實景を描寫せねばならぬのです。實情實景が鮮かに浮出てこそ、始めてそれに伴ふ感情や氣分が湧上つて來るのです。感覺的描寫といひ、印象的描寫といひ、また具象的描寫といひ、要するに皆同一の心持から出た描寫の手法です。

### 例文と練習

#### 青桐と子供

前 田 夕 暮

① 青桐の幹は青くてすべすべしてゐる。まして二十年生位の若木の快い幹の肌ざはり、冷たくてたつぷりと水をふくんでゐる。樹皮を透して青い繊細な神経が感じられる程である。

② 私の子供がその青桐の木に登らうとしてゐる。

③ 子供は、全身的に幹に抱きついて、脊をまろくして三四尺程やつとの事でのぼる。若木

① 感覺的な描寫です。  
② これからの描寫はことごとく印象的な具象描寫です。子供が眼の前にあり、くくと見えて來るでせう。



の青桐は空にひろげた若葉を、梢の方でびりびりと軽くふるはしてゐる。子供は顔を眞赤に染めて、腫を黒く光らせ乍ら、また五六尺の所までのぼつて暫くじつと泳へてゐるが、するすると直ぐにすべり落ちて仕舞ふ。

子供はすべり落ちて仕舞ふと、暫くの間は胸を小鳥のやうに膨らませ乍ら、木を高々と仰いでゐる。

子供は意を決するものゝやうに上着を地面に投げつけて、今度は勢ひ猛にのぼり始める。両手でしつかり樹を抱きしめて、靴の踵を樹の肌につけて、遮二無二のぼつて行く。が、子供の體は二尺のぼつては一尺すりさがり、三尺のぼつては二尺すり下る。そして五六尺の高さまで行つて力が盡きたのか、またするすると地上にすべり落ちるのである。もう諦めて止めるだらうと思つて、私は少し離れた所から見ると、子供は靴を脱いで一二間先の方へぼんと投出して、跣足になつて、足の裏に砂をまぶしつける。そして樹に飛び着くやうに抱きついて、からみつくやうな體のうねりを見せてから、うんうんと呻き乍ら、手も顔も眞赤にして登り始める。私は見てゐて少し苦しくなつて來たので、餘程とめようと思つたが、それでも、私までが全身に力を罩めて、思はず子供と吐く息吸ふ息を合せた。子供は忽ち五六尺の所まで登つて、ちよつと考へてゐるやうであつたが、何の

③ 光景躍如。

④ 緊張の極所。

⑤ 思はずヤンヤと叫びたくならせう。  
⑥ 何と云ふ純眞な、そして朗かな情景でせう。  
⑦ 書き出しの一段と相應じて實に巧な構想です。

造作もなくまたするするとすべり落ちて、流石に疲れたと見えて、倒れるやうに地べたに寝そべつて仕舞つた。そして、寝ながら青桐の梢を仰いでゐるのだ。

子供は寝てゐる間に直ぐに疲勞を回復したと見えて、忽ち起きあがつて、今度は襦袢もズボンも脱ぎ棄て、猿股一つになつて、傍に置いてある支那製の水甕へ片手を入れて、掌で水を掬つて口移しに飲んだと思ふと、日光の方に向つて、ふーッと霧を噴いて、腹を大きくふくらませたり、低くしたりしてゐるが、また足の裏に砂をまぶしつけて、ちよつと上を仰いで見て、更に勢ひ猛に木に飛び着く。青桐は少しゆらゆらと揺れる。

今度は見る見る間に六七尺程のぼる。第一の下枝が頭の直ぐ二三尺上の所にある。子供は滿身汗にまみれ、全身朱に染まつて、両手を長く延ばせるだけ延ばして、幹を抱いたかと思ふと、縮めてゐる脚が同時に延びる。ともう両手を上にぐつと延ばしてゐる。そして下枝に片手を掛けたかと思ふと、ひらりと身を跳らせて、その枝の上に立ちあがつた。そして私の方を見おろして、

「おーい。」といふ大きな聲をして呼はつた。

「おーい。」と私も思はず手をあげた。

青桐の葉といふ葉は、風に揺られながら六月の日の光をうけて、きらきらと喜ばしげに



光る。

〔評〕 生氣潑刺、天真無垢なる子供の木登り姿が實に生き／＼と鮮かに寫し出されてゐます。又劈頭の描寫を始めとして所々に交へた青桐の描寫も、敏活なこの子供の活動に全くふさはしい。簡潔できびきびしてゐて感覺的な筆致です。此の文全體が「生動」そのものと云つてよい位です。それから構想と云ふ點から見ても、此の文章は實に巧妙に組立てられてゐます。先づ初めに若木の青桐を出して、讀者に若々しい潑刺たる印象を與へ、さて子供の木登りとなると、漸層的にぐんぐん讀者を緊張の極所に引ずつて行つて、最後にばつと天空開豁の氣を與へて、朗らかな青桐の描寫で筆を收めてあるでせう。

### 子供百態

例文でも讀んだ如く、子供の姿を見てゐると、如何にも天真が發露して全く可愛らしいものです。或る時は無心に歌ひつゝ、砂いぢりをしてゐる。或る時は母

の手に餘る程に反り返つて泣き喚いてゐる。或はその熟睡の姿、或は又仔馬のはねる様な敏活な姿など、さうした子供の色々の姿態を觀察して具象的に描いて見るのです。

### 哀傷の夕

哀傷の經驗が無い人は幸です。しかし生れて十六七年の間には、何かしら哀傷の記憶をもつてゐるのが普通です。夕陽西に沈んで暮靄漸く深からんとする頃には、そゞろに物の悲しくて堪へられない事もあるでせう。さう云ふ折の經驗を、自分の心の姿を、自己中心の描寫法によつて表現するのです。

### 忘れ得ぬ人々

路傍に不圖見たゞけの人でも、どうかすると私達の頭には、いつまでも忘れられない印象を残す人があるものです。或は小學校の舊友などで、何かの機會に、諸子の頭に特別深い印銘を刻み込んだと云ふ人はありませんか。此の際、それらの人々を記憶の上ののぼせ、その場の情景を再び心に描き、よくその折の氣分を



味ひつゝ、それらの人々を中心に、その場の光景氣分を具象的に描いて見なさい。

## 一二 生彩ある表現 (一)

一、生彩ある表現の研究 讀者に深い感激を與へて、その共鳴を喚び、その興奮を促し、夢中に讀了せしめるやうな文章を、力ある文章と云ふのです。前卷に於いて、私達はよく分る文章といふことを學んで來ました。實際、よく分ると云ふ事は、文章の第一要件です。しかし、明晰なるもの、必ずしも讀者に感銘を與へるとは限りません。それでは、どうしたならば、力ある文章、即ち最も生彩ある表現が得られるか。この工夫に就いては、随分古くから研究せられて來たものであつて、所謂修辭法とは、かうして生彩ある表現を構成するいろ／＼の言葉の姿態を、歸納的に研究して、發見せられた表現上の法則です。

勿論、修辭法と云ふものゝ無い以前でも、種々様々の文の姿態はあつたのですし、又文章の名手が、その表現を一々かう云ふ修辭上の法則に據つて構成するわけでもないのですが、その洗練せられた表現は、自ら、修辭の法則にかなつてゐるものです。しかし、その法則を知つて、これを活用すると否とは、行文推敲の際に於ける便不便は云ふまでもなく、自ら巧拙熟否の別れ目ともなるものですから、私達も、かうした法則の一般を、心得て置く必要があります。

二、比喩の種類 前にも述べた通り、比喩は、聯想の對比から生ずる生彩を利用して、或は説明の用に供し、或は文の修飾となす手法であつて、修辭法の中で最も重要な地位を占めてゐるものです。その主なるものに左の數種があります。

(イ) 直喩 これは又明喩とも云ひます。明かに喩を示す言ひ方です。「夜は深い静寂に充ちてゐた。その暗黒は天鷲絨のやうに暖か



に感じられた「ラージュ」これは晩春の夜の暗く暖かい感じを天鵝絨の感觸に喩へたのです。この様に、抽象を具象にし、概念を感覺的に表現するところに、直喩の力強い點が宿るのです。この手法は比喩法の中でも最も多く用ひられ、またその用ひ方の適否によつて、文章の巧拙がほゞ決定されるものです。それ故直喩には、(一)具象的(二)嶄新(三)妥當(四)明白(五)簡潔と云ふことが最も大切です。

夕闇の池の面は腐つた水が澱んでゐながら、寧ろ硝子を張つてあるやうに、冷たく堅く平たく見える。大理石の廊下へ物象の映るくらゐの鮮かさに、堂の影がさかさまに映じてゐる。 —(谷崎潤一郎)—

藍色の空に小鳥の胸毛のやうな雲がフワ／＼浮いてゐる。 —(稻垣足穂)—

これらは皆、具象的に喩を示した例であつて、その場の情景は、これらの好比喻によつて鮮かに印象する事が出來ます。しかし此の際、注意すべきは、類似點の微弱なもの、若しくは曖昧なものと比較しては

ならぬことです。例へば、父母は天地の如く、師君は日月の如し。親族は譬へば葦の如く、夫婦はなほ瓦の如し(童子塾と云ふやうな文章で、父母が天地で、師君が日月はわかりませんが、親族が葦で、夫婦が瓦だと云ふ比喻は、具象的ではあつても、随分解しにくい比喻と云はねばなりません。私達は、比喻を用ひて、却つて文章を晦澁ならしめてはならぬのです。此の點から云へば、高山樗牛の「月夜の美感に就いて」といふ論文中の「是を譬へば、赤は太鼓の響の如く、青は横笛の音の如し。赤は爛漫たる牡丹花の夏に傲れるが如く、青は瀟洒たる水仙草の冬に耐へたるが如し」などは、その最も傑れた一例でせう。

障子の外は、深い水の底の國のやうである。一面に碧くさした月影を掻きわければ、手に白き泡と割れ返るであらう。 —(鈴木三重吉)—

下女が雨戸を開けてゐる。相變らず空の底が、抜けたやうな天気だ。 —(夏目漱石)—  
防波堤の上に建てられた、天氣豫報の信號燈を見やつてゐる。暗い闇の中に、白と赤と



の二つの火が夜鳥の眼のやうにキラリと光つてゐる。――(有島武郎)

これらは、嶄新な比喻の例です。嶄新、これが比喻には極めて大切な条件です。如何に面白い比喻でも、それが使ひ古されては、讀者の感興を喚ぶことは出来ません。「月は鏡のやうに冴えてゐる」とか「人情は紙のやうに薄い」とか「堅きこと鐵の如し」などいふ比喻は、今はもう陳腐になつて、格別の注意も惹かなければ、清新な感じをも與へ得ないでせう。加之、かう云ふ陳套な比喻は、その文章全體をも古臭くして了ふものです。しかし、此處に注意すべきことは、比喻は、あくまでも嶄新奇拔を尊ぶものではあるけれども、むやみに新しがつて、突拍子な、でたらめな、他人の了解し得ないやうなものであつてはならぬと云ふ事です。すなはち、嶄新と云ふことは、妥當で明白であつてこそ、始めて價值を有ち得るのです。新奇であつて、而も何人をも「なるほど」と首肯せしめるやうなものでなくてはならぬのです。この事

は、前卷の感想文のところでも述べた通りです。「軽い雲が石塊のやうに浮かんでゐる」とか、前に擧げた「親族は葦の如く、夫婦は瓦の如し」などは、その類似點の較べ方が妥當を缺き、文章を不明瞭ならしめてゐるのです。

以上に適例として掲げた比喻は、そのいづれを見ても、先づ、具象的です。さうして、清新若しくは奇抜です。同時に、妥當であり明白であり、而も簡潔です。私達が、比喻を用ひて、文章に生彩を投ずる爲には、是等の諸要件を忘れてはならぬのです。

(ロ) 隱喩 一に暗喩とも云ひます。これは、敘述の本義と比喻とを對比せしめないうで、比喻の中に本義を隠して、その印象を却つて強く鮮かにし、又その表現に深みを與へる爲に用ひる手法です。直喩に於いては多くの場合、たとへば「とか」「恰も」とか「やうである」「似たり」など云ふ説明語を伴ふものですが、隱喩に於いては、「落葉の雨が降る。」「少





りな樂音るれ凍は築建

女は人生の花である。などの如く、喩を喩とせず、そのまま、言ひ切つてしまふのです。隠喩が「煎じ詰めた直喩」と呼ばれるのはこの爲です。要するに、隠喩法の強みは、文章の無駄を省き、簡潔にして勢があり、そして尙讀者に想像の餘地を與へる所に存するのです。それだけに、直喩に比して一層妥當明白と云ふことが大切となるのです。

建築は凍れる音楽なり。 —(ゲーテ)—

古來の偉人には雄大な根の營みがあつた。その故に彼等の仕事は、味へば味ふほど深い味を示してくる。 —(和辻哲郎)—

やがて日は紅の球を揺がして、山に落ちたり。 —(徳富蘆花)—

われは言葉の大王、幻想を建築す。 —(三木露風)—

僕は坂の上を見た。夕日の橙黄色に残つてゐる空を透かして、最初に觸角を現して、それから甲殻を出して、胴を出して、這ひ寄つて來た電車が見える。電車は薄黒く見えてゐる。 —(森 鷗外)—

これらは、いづれも妥當明白な隠喩です。初心の者はとかく嶄新を



街つて、妥當を缺き、獨りよがりに陥る弊があるものですから、注意せねばなりません。

(ハ)活喩　これは人喩又は擬人法なども云ひます。人間以外のものを人間に喩へたり、或は、生命の無い物に生命を與へて、これを活動的に敘する手法です。すなはち「花笑ひ鳥歌ふ」とか「風吼え波怒る」などの類であつて、自然を寫すにしても、只あるがまゝの姿に描き出す代りに、それを人間の姿とか、人間の心言葉動作等になぞらへて現すのです。このやうに、非情を有情化して現す時は、自然を一層親しみ深く、その生きた姿に於いて表現する事が出来るのです。

遠くよりさやく、雨の歩み來て過ぎ行く夜半を寢ざめてありけり　—(若山牧水)—

晩秋、時雨降る夜半の情景です。「遠くよりさやく、雨の歩み來て」と有情化する時に、時雨は一層親しみ深いものとなり、内に聴く人と、外を過ぎ行く雨との間に、脉々としてつながる生命の通ひが感じられ



るのです。

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をゴッくと打ちつけては又ゴッくと打ちつけて、皆  
瘦せかけた落葉木の林を、一日いちめ通した。木の枝は時々ヒュウ／＼と悲痛な響を  
立て、泣いた。短い冬の日は、もう落ちかけて黄色な光を放射しつゝまた泣いた。

—(長塚節)—

手をついて歌申上ぐる蛙哉

—(宗鑑)—

爐の中では松の脂瘤がブツブツ音を立て、燃えてゐる。納屋の方ではもう鼠がコト  
／＼騒ぎ出した。戸外はもう寒さと闇とがひし／＼と此家の周囲を取巻いて、槻の巨  
樹は縦横に腕と腕とを組み合はせて何かたくらむやうにびそ／＼語り合つて立つて  
ゐる。

—(吉江喬松)—

これらはいづれも活喩によつて潑刺たる表現を得た適例です。活  
喩は、文章中に部分的に用ひられる外に、その文章全體をこれによつ  
て組立てる事もあります。

(二) 諷喩 これは又寓喩とも云ひます。イソツプ物語や色々な寓

話やお伽噺の類に見るやうな、いろ／＼の動物とか草木とか、或は風・  
太陽等を假りてきて教訓や道徳や、其の他の意味を寓する手法です。  
例へば「猿も木から落ちる」を以て「専門家でも、時には、あやまつてしく  
じることがある」といふことを示し、「鳥なき里の蝙蝠」を以て「凡愚の間  
に跳梁する小人」を諷するなど、本義を全く省略して、たゞ喩だけを掲  
げるのです。しかし、その喩義は、筋の明かな面白味をもつてゐます  
から、讀者の興味を惹き易いものです。諷喩は、長い一篇の物語全體  
に應用されるばかりでなく、一句一章に用ひられることも多く、その  
用ひ方によつては、相當に生彩を發揮し得るものです。

(ホ) 提喩と換喩 提喩とは、部分を云つて全體を意味したり、或は全  
體を云つて部分を意味するなど、量の關係に立つ一方を以て他を代  
表する手法です。例へば「白髪」を以て「老人」を表し、「花」を以て「櫻」を表す  
などが、それです。



換喩とは數量の外に、因果主従等の關係に立つ一方を以て、他を表す手法です。例へば、蓑と笠を以て、雨に耕す農夫を表し、大和撫子を以て「日本女性」を意味する類が、それです。提喩、換喩共に印象を鮮明ならしめ、文に變化と美とを與へるものであつて、俳句とか、その他の韻文には屢用ひられるのですが、普通の散文には餘り用ひられてゐません。

例文と練習

椎の木

芥川龍之介

①適切な隱喩と明喩。  
②活喩。  
③反對聯想です。

椎の木の姿は美しい。幹や枝はどんな線にも大きな底力を示してゐる。その上、枝を鎧つた葉も鋼鐵のやうに光つてゐる。この葉は露霜も落すことは出来ない。たま／＼北風に煽られ、ば、一度に褐色の葉裏を見せる。さうして男らしい笑ひ聲を擧げる。併し椎の木は野蠻ではない。葉の色にも枝ぶりにも何處か落著いた所がある。梅の木はこのつゝまじさを知らない。唯冬との鬨ぎ合ひに荒々しい力を誇るだけである。

④これも反對聯想。かう云ふ反對聯想の提示が如何にもよく椎の木のつゝまじい着實な特色を表してゐます。

⑤深みのある同類聯想。

⑥近接聯想です。

同時に又椎の木は優柔でもない。小春日と戯れる樟の木の戦ぎは椎の木の知らない氣軽さであらう。椎の木はもつと憂鬱である。その代りもつと着實である。椎の木はこのつゝまじさの爲に我々の親しみを呼ぶであらう。又この憂鬱な影の爲に我々の浮薄を戒めるであらう。

椎の木の姿は美しい。殊に日の光の澄んだ空に葉照りの深い枝を張りながら、靜かに聳えてゐる姿は莊嚴に近い眺めである。雄々しい日本の古天才も皆この椎の古い木のやうに悠々としかも嚴肅にそゝり立つてゐたのに違ひない。その太い幹や枝には風雨の痕を残した儘……

なほ最後につけ加へたいのは、我々の祖先は杉の木のやうに椎の木をも神と崇めたことである。

〔評〕 椎の木に對する一種の感想文ですが、或は比喩を用ひ、或は聯想を對比せしめて、椎の木の特色と氣分とを深みのある筆で遺憾なく敘べ盡してゐます。かう云ふ傑れた文章を鑑賞すると、私達の植物に對する愛の眼がまだ十分に見開かれてゐなかつた事を反省させられま



## 桐の木

す。私達の観察や感受性や表現法のまだ未熟である事を教へられます。それだけに、此の文から私達の學ぶべきもの、尠くない事に氣づくでせう。

例文に於いて學び得た所——愛觀察感受性表現法等——に依つて、桐の木の特色と氣分とを敘べるのです。その優しみに、好もしきを感じる人もあるでせう。或はまた、そのはかなさに不満を抱く人もあるでせう。いづれにせよ、比喻や聯想を自在に驅使して、力強い文章を書いてほしいものです。

## 秋

秋といふものを人格化して眺めたら、どんな人柄になるでせう。嘗て綱島梁川氏は、秋を哲人高士の姿に譬へたことがあります。諸子には諸子で又別の感想がある筈です。龍田姫のやうな艶麗な姿を想像するもよいでせう。清楚な逸人を譬へに取るも面白いでせう。その人となりによせて、秋の姿と感情とを寫

## 風の情趣

すのです。

風も季節に應じて、それ／＼特殊な情趣を持つものです。花誘ふ風青葉に渡る風蒼海に白帆を走らせる風山林に木の葉を散らす風など、趣味の眼に映る風の情趣も、人の氣象を思はせるものがあります。本文中に引用した長塚氏の文章や吉江氏の文章の様に、風の持つ感情を書いて見るのも興味ある事です。

## 一三 生彩ある表現(二)

一、誇張 「滿場立錐の餘地もない」とか「汗が瀧のやうに流れる」とか、或は「斷腸の思ひがした」など云ふ様に、事實を痛切に描き感情を自然に表すために、實際よりは極端に大きく、或は小さく云ひなす手法を誇張といふのです。



忽ち足下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、何處で鳴いてゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明かに聞える。せつせと忙しなく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されてたまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕も無い。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、又鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。

—(夏目漱石)—

瞬間にギギツと籐椅子が鳴ると、父の顔がひよいと此方を見向いた。はつと氣がつくと、カチンと音がするほどに視線と視線とがぶつかつてしまつた。

—(里見 弴)—

芥子粒の中に家を建て、そこで讀む書物の文字くらゐの大きさの文字だ。

これらは、皆事物を、實際よりも過大又は過小に云ひなして、讀者の感情を強く刺戟し、その印象を深からしめてゐる適例です。しかし、餘りに度外れな、わざとらしい誇張は、最も文章の品を下げるものです。誇張は感情の自然に出たもの——云ひ換へると、誇張しなくては、どうしても實感の出ない場合にのみ用ふべきものです。

二、現寫 過去の事實でも、未來の豫測でも、すべて現在の句法を用

ひて、それを眼前に見るやうに描寫する手法を現寫、又は現在法と呼ぶのです。

少し疲れたので、草を藉いて横になる。私のすぐ顔のそばに銀蘭が白く動いてゐる。手のところには羊齒が薄紅く若葉を出してゐる。日がチラ／＼とこぼれてくる。仰いで見ると、犬しでの軟い若葉を透して、日のありどころがわかる。風に梢が揺れる度にチラ／＼と光がこぼれるのだが、少しもまぶしくはない。こゝで寝ながら私は風呂敷をひらいて、ゆで卵を食べる。林のはづれは野路になつてゐるので、時折人が通るが、私の臥てゐるのには氣がつかぬ。

—(前田夕暮)—

全體が現寫から成つてゐます。現寫は、簡潔です。簡潔なだけに文章を引き緊める力と、事物を活現する働きとを有つてゐます。それ故、描寫の最も緊迫した部分は、大抵この現寫法によつて書かれるものです。

三、漸層漸降 げに奇しきは海なり。海より奇しきは空なり。空



より奇しきは人の心なり」(ゲーテ)と云ふ様に、浅より深に、狭より廣に一段一段と語句の調子を高め、意味を強めて、讀者の感動を最高調のところまで誘導する筆法を漸層と云ふのです。

土をならすだけならさほど手間もいるまいが、土の中には大きな石がある。土は平に  
しても石は平にならぬ。石は切り碎いても岩は始末がつかぬ。掘り崩した土の上に  
悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る氣色はない。 —(夏目漱石)—

交番の前には人が一人たかり二人たかりはては十人になり二十人になり忽ち人山を  
築いてしまつた。

このやうに、漸層は後ほど強いものを擧げなくてはならぬのです。層々相重ねて次第に文を強調し、讀者の感情を一段毎に刺戟して緊張させ、従つて能く所説に傾聽せしめると云ふところに、漸層法の強みがあるのです。

しかるに、之に反して、次第に、感銘の微弱なものを提擧する手法に

も亦、一種の生彩を生ずるものであつて、此の手法を漸降又は反漸層と云ひます。例へば、彼は努力して博士になつたから偉い。その努力も蚤の胃袋を十年かゝつて研究したのだから、あきれざるを得ない。など云ふのがそれです。漸降は、次第に緊張を缺き、或は急に力抜けがするところに、一種の滑稽な感じを生ずるのが常です。それ故、滑稽な趣を表さうとする様な文章には、漸降を用ひて相當の効果をあげ得るのです。しかし一般的に云ふと、漸降は、文章を龍頭蛇尾に終らせるものですから、注意せねばなりません。

四、對句 春は花、秋は紅葉とか、豹は死して皮を留め、人は死して名を留むなど云ふ様に、相對する句調の言葉を並行させて、文の調子を美しくし、印象を鮮かにする手法を對句と云ふのです。對句には、單に形式のみを對比せしめて、音調の美しさを狙ふ聯對と、尙その上に、内容の反對するものを照應せしめて、讀者の感銘を強く惹く對照と



の二種があります。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだ時、眼がさめる。雲雀の聲を聞いた時、魂のありかゝ判然する。――(夏目漱石)――

都會は蜘蛛の網のやうな惱ましさに囚はれて、息づまる塵埃立ち並ぶ煙突、太陽さへもごみを喰つて生きてる。――(白鳥省吾)――

これらは皆、巧妙な聯對の適例です。しかし、聯對も餘り屢用ひては、却つて文章を浮薄ならしめるものですから、注意が肝要です。

山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。――(王陽明)――

借る時の地藏顔、返す時の閻魔顔。――(俚諺)――

鳥と蟲とは鳴けど涙落さず。日蓮は泣かねども涙ひまなし。――(日蓮上人)――

これらは皆、對照の例であつて、一つの事柄をはつきりさせる爲に、他の著しく目立つやうな、反對の事柄を持つて來て對照させてあるのです。しかし、これが更に進むと、例へば、

都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹く白河の關。――(能因法師)――  
若草に雲雀あがりし野邊行けば薄穂に出でて百舌ぞ鳴くなる。――(熊谷直好)――  
と云ふやうに、兩々相映發せしめる手法となります。對照の上乗なるものは寧ろ此の方です。

月は赤く星は青い夏の夜を浮かれ歩き露清く草匂ふ夏の朝を喜んで居る中に、いつとなく朝夕の風が身にしみて來る。――(永井荷風)――

これは聯對と對照と、兩者の妙を發揮した例です。

**五、反覆** 同一又は類似の語句を重ね用ひて、文の調子を強くしたり、柔げたりする手法を反覆と云ふのです。

墨を磨つて筆をしめて、卷紙を睨めて、――卷紙を睨めて筆をしめて、墨を磨つて、――  
――同じ所作を同じ様に何遍も繰返したあと、自分にはとても手紙は書けないと諦めて、硯の蓋をしてしまつた。――(夏目漱石)――

鶯やまた言ひなほし言ひなほし。――(千代女)――  
鶯の鳴きてるにけり久しくも忘れるし鳥の鳴きてるにけり。――(若山牧水)――



これらは皆、同一又は同様の語句を反覆して、その表現に力を添へ得た例です。

六、設疑 それと判断のつく事實に對して、「さうであらうか」と云ふやうに、わざと疑問をかけて、意味を強める手法を設疑と云ふのです。

秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか浪の寄するか

〔菅原道真〕

この設疑あるが爲に、この歌は一層切實な印銘を與へるのです。すなはち、濱風の吹上に咲き亂れてゐるあの白菊は、果して花であらうか。あれは、花ではなくして、打寄する浪が花と散つてゐるのではないだらうか。と云ふ様に、讀者の注意を、その一點に集め、白菊の印象を愈鮮かならしめてゐるのです。その他、自問自答の形で書く場合もあるのですが、いづれにしても設疑を交へた文章は、變化を生じ、生彩を發揮するものです。

七、逆語皮肉 わざと逆を説いたり、事の裏を述べて、事實を一層深

刻に感じさせる手法を逆語と云ふのです。

急がずば濡れざらましを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨

〔太田道灌〕

「お母さん、表へ出てもいいの？」茂ちゃん、は御飯もそこ／＼にして下駄を突つかけた。

手には線香花火を持つてゐる。

「え、出たければ出てもいいわ。歸らなくつてもいいですよ。」線香花火がして遊びたければ、お家でなさいと言つてあるぢやないの。

逆語は、表面にあらはれた意味と、裏面の眞實の意味とが反對です。から、作者は、何處かで讀者にその眞意を掴ましめるやうな口調なり敘述なりを示さねばならぬ事は勿論です。この逆語に、更に毒氣を含めたものが皮肉又は反語です。逆語は、必ずしも攻撃の意味を含まないのですが、皮肉は、相手若しくは一般世人の弱點や急所を衝くところに特色があるのです。

當時彼の描いた水彩畫の一つに逆さまにした方が遙かに畫らしくなるものゝあつたのは、今でもよく覚えてゐる。〔芥川龍之介〕



お前のやうな好い姪をもつて、人様の前で妾アほんとうに肩身が廣くつて、何様にか嬉し  
いよ。

—(幸田露伴)—

お鄰へ聞えるやうに猫を追ひて、  
泣くノ)もよい方を取る形身分け

—(川柳)—

皮肉は眞正面から云ふよりも、却つて人を刺す鋭さがあるのですが、  
餘りに凝りすぎては、却つてその眞意が通じなくなり、全く效力を失  
ふものです。

八引用 先人の語句文章や、故事や諺などを引用して、自説を助け、  
或は文章の内容を豊富にすることを、修辭上引用法と呼ぶのです。

ナポレオンも言つた、最後の五分間だと。戦争ばかりではない。萬事みなこれだ。

「衣食足つて禮節を知ると云へり。」

此の道を行きませうよ。「急がば廻れ」といふことがあるではありませんか。

お母さんにいくら小言をいはれても馬の耳に風。幹夫ちやんはちよつと隙があると、

もう裏の柿の木に登つて、枝に腰かけて足をブラシヨク／＼させてゐるのでした。

是等はいづれも、古人の言葉や俚諺を引用して、或は自説を一段と強  
め、或は文章に趣を添へた例です。

「君俳句をやりますか。」と来たから、こいつは大變だと思つて「俳句はやりません。さや  
うなら。」と、そこ／＼に歸つて来た。俳句は芭蕉か髪結床の親方のやるものだ。數學の

先生が、朝顔やに釣瓶とられて堪るもんか。

—(夏目漱石)—

この文章では「朝顔や釣瓶とられて貰ひ水」(千代女の句を、もぢつて「俳  
句などに夢中になつて堪るものか」と云ふ意を利かしてあるのです。  
勿論これも、文章に生彩を投ずる爲の引用ですが、前に挙げた諸例と  
比べて見ると、彼にあつては、いづれも引用があからさまであるのに、  
此に於いては、引用があからさまでないでせう。それ故、前者の手法  
を明引又は舉例と云ひ、後者の手法を隠引と云ふこともあるのです。  
しかし、その何れにしても、引用は、読者がよく知つてゐる事でない  
と、効果が薄いわけです。



九、修辭の力 以上二章に互つて説いて來たところは、要するに、文章に生彩あらしめる爲の技巧です。しかし、こゝに私達の決して忘れてならぬ事は、文章の巧拙は、あくまでも心の問題であつて、技巧上の問題ではないと云ふ事です。技巧の末にとらはれて、心の純眞な發露を妨げられるやうでは、技巧上の知識も、無きに如かずです。たゞ私達の心の眞實の姿を表現する爲の手段となつた時、始めて技巧が、その面目を發揮したのです。技巧は、あくまでも手段です。それ故、修辭上の技巧が技巧として目立つ時、その技巧は既に失敗したと云はねばなりません。技巧にとらはれずして、自由に自然にこれを驅使するに至つた時、始めて私達の表現は一段の躍進を遂げ、縦横に生彩を發揮するやうになるのです。

例文と練習

① 精妙な明喩。  
② 嶄新適切な隱喩。

③ 擬聲語や擬態語の用ひ方も巧妙です。以下留意。  
④ 印象的な描寫  
⑤ 實に巧緻な具象描寫。眞珠を削つた様な一は清新な明喩。

⑥ 輕快な文鳥の動作。このあたり情景躍如

文 鳥

夏 目 漱 石

文鳥の眼は眞黒である。① 喙の周圍に細い淡紅色の絹絲を縫附けたやうな筋が入つてゐる。② 眼をばちつかせる度に、絹絲が急に寄つて一本になる。と思ふと又丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながら、この黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。さうして「ち」と鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はばつと留り木を離れた。さうしてまた留り木に乗つた。④ 留り木は二本ある。黒味がかつた青軸を程よき距離に橋と渡して横に並べた。その一本を軽く踏まへた足を見ると如何にも華奢に出來てゐる。⑤ 細長い薄紅の端に眞珠を削つた様な爪が着いて、手頃な留り木を旨く抱へ込んでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。頻に首を左右に傾ける。⑥ 傾けかけた首をふと持ち直して、こゝろもち前へ伸ばしたかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の眞中あたりに具合よく落ちた。「ち」と鳴く。さうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

自分は顔を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて戸棚から粟の袋を出して、餌



⑦ 小鳥と大きな手との対照の妙。  
⑧ 奇抜にして適切な感想。  
⑨ 文鳥の姿や動作が塙塙として浮き出て來ます。

⑩ 印象的な描寫  
⑪ 絶妙な誇張法  
⑫ これも文鳥の輕快さに對する絶妙な比喩  
⑬ 以下文鳥の動作に對する個性的な描寫。  
⑭ 微妙な音の描寫。  
⑮ 精妙無類の聯想。

壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一ぱい入れて書齋の縁側へ出た。大きな手をそろ／＼籠の中へ入れた。すると、文鳥は急に羽ばたき始めた。細く削つた竹の目から、暖いむく毛が白く飛ぶ程に翼を鳴らした。⑤ 自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺を、留り木の間に漸く置くや否や、手を引込みました。籠の戸はぱたりと自然に落ちた。文鳥は留り木の上に戻つた。⑥ 白い首を半ば横に向けて籠の外にゐる自分を見上げた。それから曲げた首を眞直にして、足の下にある粟と水とを眺めた。

自分は籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度堅横に向け直した。やがて一團の白い體が、ぼいと留り木の上を抜け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が半分餌壺の縁から後へ出た。⑩ 小指を掛けてもすぐ引つくり返りさうな餌壺は釣鐘のやうに靜かである。さすが文鳥は輕いものだ。⑪ 何だか淡雪の精のやうな氣がした。文鳥は、つと嘴を餌壺の眞中に落した。さうして二三度左右に振つた。綺麗にならして入れてあつた粟がばらばらと籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。復嘴を粟の眞中に落す。復微かな音がする。その音が面白い。靜かに聞いてゐると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。⑮ 莖程な小人が黄金の槌で瑤瑤の碁石をつゞげざま

に。敲。い。て。ゐ。る。や。う。な。氣。が。す。る。

〔評〕 精緻な觀察によつて捉へ得た文鳥の輕快な動作や姿を、これ又輕快微妙な筆で描き盡してゐます。その細かな觀察、鋭い感覺、精妙な比喩の自在な驅使等に至つては、十分に玩味すべきものがあります。動作を敘すにも、色彩や形で現して行くので、色も直ちに生きた文鳥の色として印象され、形も直ちに生きた文鳥の形となつて感銘されるのです。又、この文章が口語體ながら文語文にも劣らぬ位に簡潔で齒切れのよい表現を得てゐるわけは、語彙の豊富といふこと、現寫法を適當に取入れてあることとに由るのです。

### 冬日小景

荒涼たる冬です。あらゆる物がみなその赤裸々な姿を見せてゐます。淋しいと云へば、いかにも淋しい姿です。しかし、鋭く澄み渡つた大空の下に、靜かに休息してゐる彼等の姿は、見様によつては、これ程また懐しいものもありますまい。



ほろ／＼と山茶花の散るあした、入日の眞赤に染まるゆふべ、私達の静觀の眼に映る様々な自然の姿には、汲めども／＼盡きない味があるものです。

時雨 友と閑談する時、サラ／＼と前栽を過ぎ行く時雨、夜半の寢覺めに、音たてゝ雨戸うつ時雨、さては時雨るゝ遠景時雨るゝ近景いづれも深い趣のあるものです。

冬風 星月夜の空に吠える松籟の物凄さ。落葉をカラ／＼と吹きよせる風の淋しさ。波頭をチラ／＼と閃かせて黒い海を荒れて来る風の鋭さ。――かうした特殊の情景を生み出すのが冬の風です。

水仙 日あたりのいゝ庭前に、白銀の皿黄金の盃を捧げてゐる清らかな水仙の姿は、けだし冬の穩かな姿の象徴でせう。これを取つて淨机の上に置くも可梅に添へて床の間に活けるも尙妙。

枯野 霜白き枯野の朝は靜かなものです。朝日にそれがきらめき渡る風情は神々しいまでに穩かで清い。仰いで天の深さにうたれ大いさに感ずる時、天地宇宙に遍在する見えざる力を思はずにはゐられませんまい。

## 一四 人物描寫について

一、人物を描くには 人物を描くには、その風采、その態度、その言語、その動作、その表情、その習癖、さてはその心情、その性格など、あらゆる方面から觀察して得た印象を描いて、その風姿を髣髴せしめ、その個性を浮き出さしめなくてはなりません。人物の描寫に於いて最も大切な事は、あくまでも個性の描寫といふことです。それ故、一節の言葉、一瞥のまなざしの中にも、その人物特有の個性の閃きを捉へるだけの細心さが必要です。その容貌や動作をいかに丹念に書き並べようとも、その氣分や心理をいかに精細に描かうとも、若しそこにその人物の個性といふものが表れてゐなかつたならば、それは到底眞の人物描寫と稱するに足らないのです。人物描寫に於けるいかなる手法も、この個性の描寫と云ふ一事が根本となるのです。國木



田獨歩の「武藏野」の中に、

若し君、何かの必要で道を尋ねたく思はゞ、畠の中に居る農夫にきゝ給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲をあげて尋ねて見給へ。驚いてこちらに向き、大聲に教へてくれるだらう。若し少女であつたら近づいて小聲できゝ給へ。若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。鷹揚に教へてくれるだらう。

と云ふ一節があります。これは、田舎の老人や少女や青年等の一般的な性格を描寫したものに過ぎないのですが、それでもなほ、只これだけの文句で、樸實な老農夫、都會の人達などとはろくに口も利けないやうな世間見ずのおとなしい田舎娘のはにかみ振り、新聞や雑誌などで新しい思想の一端もかじつてゐるらしい若者の姿などが、よく窺はれるでせう。しかし、

院長の前には、頭に手拭を被つた在方の主婦おかみさんの様なのが椅子にかゝつてゐた。院長は汚點みだらけの上つぱりを着て、口の利きやうからが、いら／＼した、物に構はないやうな氣の置けない醫者であつた。

—(鈴木三重吉)—

これなどは、かなり鋭く個性を捉へた一例であつて、院長の物にこだはらない磊落な性格や、その風采に頓着せぬ大ざつばな様子などが、僅か一二の事象の中にも、はつきりと現れて見えます。

二、外面描寫 會つて話を交はした事もない人の風姿や性格などを、たゞ文章の上だけで、はつきりうなづかせようと云ふには、それ相當の工夫苦心が要るものです。こゝに外面描寫と云つたのが、其の工夫の一つです。これは、風手とか服装とか舉動とか言語とか、さうした外面的の觀察による人物描寫です。以下これについて概説して見ませう。

(イ) 風手服装 容貌や風采の描寫は、最もよく其の人物の外形を表すものですが、これも精細に過ぎると、却つて印象を薄くし文勢を殺ぐものです。顔を描くに、眉から眼から鼻から頬からと、いちいち細寫して行つたからとて、必ずしも其の容貌を印象的に生動せ



しめる所以ではないのです。特徴をさへ十分に捉へたならば、僅かに一眼、隻手の描寫を以てしても、十分にその人物の個性を表し得るのです。例へば、

一寸見ると泣き出しさうな顔に見えるやうな目で、同時に眠いやうな、又何が何でも平氣だといふやうな、さうかと思ふと陰鬱なやうな、しかも笑つてゐるやうな、あらゆる表情を一度に發現してゐる目であつた。それが二分の一秒にちき／＼瞬きをする。睫の閉閉と共に、目の上下の皺と、小鼻との痙攣が加はつて、迅速に且つ間斷なく、ちき／＼ちき／＼と瞬いてゐるのである。それでもつて目がくたびれるせゐるでもあるまいが、八はよく居眠りばかりしてゐた。とき／＼歩きながら眠つてゐた。

—(鈴木三重吉)—

これは目によつて、八といふ白痴の個性を描いたものです。これだけでも八といふ人物の姿は躍動してゐます。しかし風手、服装等を描く場合には、部分々々を細寫するよりも、事件に聯關せしめては、其の場、其の場の個性的な現れを描いて行くと云ふ方が、効果

的。な。方。法。で。す。例へば、芥川龍之介氏がその「蜜柑」の中で、二等客車に乗つてゐる「私」と云ふ主人公の前に、發車間際にあたふたと驅込んで來た小娘を、

それは油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある鞆びんだらけの兩頬を氣持の悪い程赤く火照ほらせた、如何にも田舎者らしい娘だつた。しかも垢じみた萌黄色ももいろの毛絲の襟卷がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしっかりと握られてゐた。

と敘してゐるなどはその適例であつて、いかにも田舎娘らしいその人物が躍動して見えます。即ち、こゝでは其の時、其の場の個性的なもののみを描いて、却つて効果をあげてゐるのです。

(口)表情態度 心の動きは直に表情や態度に現れるものです。それ故、表情や態度の描寫によつて、心の姿やその動きを表さうとす



るのが、一般の手法です。しかし、表情や態度と云ふものは、瞬間的なものですから、それを捉へて内心の姿を表さうとするのは、餘程むつかしい仕事であつて、鋭敏な観察眼と的確な描寫とを俟たなくしてはなりません。

「まあ此の兒は、此の兒は」と母親は口惜しいので泣くのか可笑しいので笑ふのか、眼には涙、口元には笑味、呆れ返つて後の言葉が出ない。

—(國木田獨歩)—

子供の歸りを心配してゐた母親の、子供の無事な姿を見て喜ぶ心と、親の心配も知らぬ顔に、得意に喋り散らす子供の口を憎む心とが、こんがらがつて、妙に歪んだ表情です。描寫よりも寧ろ説明に近い手法ですが、よく心の動きを示してゐます。

傳右衛門は、座につくと、太い眉毛を動かしながら、日にやけた頬の筋肉を、今にも笑ひ出しさうに動かして、萬遍なく一座を見廻した。

—(芥川龍之介)—

これは筋骨逞しい樸直な傳右衛門と呼ばれる武士の、慇懃な態度

の中にも、包み切れぬ得意な心情を表して一座を見廻したところ  
です。胸に溢れる愉快な感情が眉宇の間にひらめいてゐます。  
(ハ)言語動作 言語動作は表現の窓です。私達は言語動作を通じて、その人の感情や意欲を知るので、それ故、人物描寫に於いては、この言語動作の特徴を寫し取ると云ふ事が極めて大切です。殊に會話は、その人物の教養・品格・職業・年輩等を遺憾なく發揮するものです。

雨が止んだらしい。障子が明るくなった。

「あら、いいお天氣になつたこと。」

これは妹の聲らしい。

「洗濯物をいたませうか。」

これは下女らしい。

「傘をお乾しよ。」

これは母らしい。



「やあ、兄さん、虹が出たよ。」

弟が庭で呼んでゐる。読みかけの本を伏せて障子を開けると、果して東の空に虹が……。

庭の潦水たきりちに、大きな蝶が二疋、心持よきさうに水を吸つてゐる。桐の花がほとりとその潦水に落ちた。

此の文は、「雨上り」と云ふ一つの現象に對する、妹や下女や母や弟の言語の特色を、それ／＼かなり巧みに捉へてゐます。殊に「洗濯物をいたしませうか」「傘をお乾しよ」などは、それと一々斷らずとも、下女であり、主婦である事が推察出來ます。實際、熟練した手腕になると、會話だけの描寫を以て、一篇を成し、その中によく人物の複雑な心理や性格や、表情、動作、態度や、風、手、服裝に至るまで髣髴せしめ得るものです。それから、前に引用した芥川氏の「蜜柑」には、また次のやうな一節があります。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心持がして、思はずあたりを見廻すと、何時の間にか例の小娘が向側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思ふやうにあがらないらしい。あの鞆だらけの頬は愈々赤くなつて、時々鼻洩はなをすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一緒に、せはしなく耳へはいつて來る。

こゝでは、小娘の如何にも田舎者らしい、その人物が、その動作を通じて巧みに描き出されてゐます。要するに、言語、動作は「心」を直接に物語る、現れですから、私達は人物描寫に於いて特に是等の描法に習熟しなくてはなりません。

**三、内面描寫** 人物描寫には、更に内面描寫又は心理描寫と云ふ手法があるのです。これは、その人物の氣分とか心情とか性格とか、さう云ふ心理にまで立入つてする描寫法です。外面描寫は、外面に現れた形を媒介として、その人物の心の姿を描くのですが、人の心情と



か性格とかは、かう云ふ外面描寫のみでは完全に表し盡す事は困難です。それ故どうしても、その人物の内面に潜入して、その心の姿を端的に描くと云ふ事も必要となるのです。しかし、心の動きそのものには、何等具體的な姿は無いのですから、或は比喻を用ひ、或は形容の力を借りて來て、これを描き出す事になるのが普常です。

頭の中の状態が、かういふ風に眺められた。葉の茂つた竹藪が頭中擴がつてゐる。

墨繪のやうに莖も枝も黒竹だ。それが風でざわ／＼鳴り続ける。なかに細い銀の竹もまじつてゐて、黒い竹藪全體がゆるる工合でちか／＼光る。それが左の耳に起る痛みなのだ。

—(里見 淳)—

これは、比喻を借りて、頭の中の混亂状態や左の耳の疼痛を描いた文章で、殊に「なかに細い銀の竹もまじつてゐて、黒い竹藪全體がゆるる工合でちか／＼光る」などは、いかにも鋭い、神經的な描寫です。

或る曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下してぼんやり

り發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には珍しく私の外に一人も乗客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いブラットウォームにも、今日は珍しく見送の人影さへ跡を絶つて、唯櫓に入れられた小犬が一匹、時々悲しきうに吠え立てゝゐた。これらはその時の私の心持と、不思議な位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には言ひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうな、どんよりした影を落してゐた。私は外套のポケットへ、じつと兩手をつゝこんだまゝ、そこにはひつてゐる夕刊を出して見ようと云ふ元氣さへ起らなかつた。

—(芥川龍之介)—

これは例の「蜜柑」の書き出しの一節です。「まるで雪曇りの空のやうな、どんよりした影を落してゐた」とは、「私」と云ふ主人公の頭の中の疲勞感倦怠感を、比喻によつて描いたものですし、その他の部分は、象徴的な手法と、次に説く背景描寫とに依つて、主人公の心理状態を表さうとしたものです。

四、背景描寫 此の例に於いて、私は外套のポケットへ、じつと兩手を以下の敘述は、それだけで既に主人公の疲勞感倦怠感を表してゐる



ます。すなはち象徴的手法たる所以です。しかるに書き出しから「吠え立てゝゐた」までは主人公の心の姿を一層はつきり浮き出させ、一段と強調せんが爲の一つの手法であつて、これを背景描寫と云ふのです。私達は前巻に於いて、春には春の情趣があり、秋には秋の氣分がある。そして、これを描くこそ、その自然描寫に生彩を投ずる所以だと學んでゐます。人物描寫に於いても、これと同様、そこに背景描寫を伴ふのでなければ、本當に力強い表現は得られないのです。こゝに背景とは、周圍の事物、狀態、場所、時、景、情、色、調等、すべてその人物の描寫を明かにし、力強くするもの、換言すれば、雰圍氣を醸し出す一切のものを云ふのです。

立てきつた障子には、うららかな日の光がさして、檜材たる老木の梅の影が、何間かの明るみを、右の端から左の端まで畫の如く鮮かに領してゐる。元淺野内匠頭家來、當時細川家に御預り中の大石内藏之助良雄は、その障子を後にして、端然と膝を重ねた儘さ

つきから書見に餘念がない。

—(芥川龍之介)—

これは「或日の大石内藏之助」の冒頭の一節です。この一文に於ける「立てきつた障子云々」の背景描寫が、いかに高雅な、適切な背景をなしてゐるか、又このために、大望を遂げた後の大石内藏之助の態度や心理が、いかに鮮かに浮き出て来るか、深く味解すべきです。要するに、私達は、人物の描寫も、適切な背景描寫を持つて、始めてその精彩を十分に發揮し得るものだと云ふ事を忘れてはなりません。

### 例文と練習

母

芥川龍之介

時刻をはかつて、先生は、應接室の扉をあけた。中へはひつて、おさへてゐた把手を離すと、椅子にかけ、てゐた四十恰好の婦人の立上つたのが、殆ど同時である。日本人に特有な丸顔の琥珀色の皮膚色をした賢母らしい婦人である。先生は一瞥して、この容の顔をどこかで見た事があつたやうに思つた。

①一瞥の印象。  
②風中の簡潔な描寫。



③如何にも「賢母らしい」婦人の言語・動作

④青年の風手を通じて婦人の風手を浮き出させた手法

⑤禮儀正しい、つましやかな婦人の態度から云ふ物腰にもよく婦人の性質が窺はれるでせう。言語・言語と云ひ動作と云ひ、その人の心の姿を窺ふべき書き表し方ではないなりません。

⑥先生の様子もよく分ります

⑦この會話で二人の姿が髮髷として浮び出ます。⑧いかにもしつかり者らしい婦人の性質がよく表れてゐます。⑨このさりげない外貌こそ婦人の性格を力強く物語つてゐるのです。

先生は愛想よく會釋した。

「私○は○西山○憲○一○郎○の○母○で○ご○ざ○い○ま○す。」

婦人ははつきりした聲でかう名乗つて、それから丁寧に會釋を返した。西山憲一郎と云へば先生も覚えてゐる。生徒の一人でこの春腹膜炎に罹つて大學病院へ入院したので、先生も序ながら一二度見舞に行つてやつた事がある。この婦人の顔をどこかで見た事があるやうに思つたのも偶然ではない。あの眉の濃い元氣のいゝ青年とこの婦人とは日本の俗諺が瓜二つと形容するやうに驚く程よく似てゐるのである。

「はあ、西山君の……さうですか。」

先生は獨りで頷きながら、小さなテーブルの向うにある椅子を指した。婦人は一應突然の訪問を謝してから、又丁寧に禮をして、示された椅子に腰かけた。

「西山君は如何です。別段御容態に變りはありませんか。」

「はい。」

婦人は、つゝましく兩手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから靜かにかう言つた。やはり、落着いた滑かな調子で言つたのである。

「實は、今日も悴の事で上つたのでございますが、あれもたうといけませんでございま

した。在學中は、いろ／＼先生に御厄介になりました……」

⑧先生は茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた團扇をとり上げながら、無然としてかう言つた。

「たうとういけませんでしたかなあ。丁度これからと云ふ年だつたのですが……すると、何時になりませうかな、なくなられたのは。」

⑨昨日が丁度初七日でございます。何しろ、手のつくせる丈はつくした上なのでございますから、諦めるより外はございませぬが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて愚痴が出ていけませんのでございます。」

⑩こんな對話を交換してゐる間に、先生は意外な事實に氣がついた。それはこの婦人の態度なり、舉措なりが、少しも自分の息子の死を語つてゐるらしくないと云ふ事である。眼には涙もたまつてゐない。聲も平生の通りである。その上、口角には微笑さへ浮かんでゐる。これで話を聞かずに外貌だけ見てゐるとしたら、誰でもこの婦人は日常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたに相違ない。先生にはこれが不思議であつた。が、第一の發見の後に、間もなく第二の發見が次いで起つた。丁度主客の話題がなくなつた青年の追懷から、その日常生活の細事に及んで、更に又、もとの追懷へ戻らうとしてゐた時で



このあたりの様子、目に見えるやうでせう。

表面ではさりげなく装つてゐても心では咽び泣いてゐたのです。その激情を壓へつけようと努力する苦悶の現れです。而もこれが如何によく此の婦人の性格を物語つてゐるか深く味つて見ません。背景描寫。

ある。何かの拍子で、朝鮮團扇が先生の手をすべつて、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。會話は無論時刻の繼續を許さない程切迫してゐた譯ではない。そこで先生は半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて床の方へ手をのばした。團扇は小さなテーブルの下に――上靴にかくれた婦人の白足袋の側に落ちてゐた。その時、先生の眼には偶然婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持つた手がのつてゐた。勿論これだけは發見でも何でもない。が同時に、先生は婦人の手のはげしく慄へてゐるのに気がついた。慄へながら、それが感情の激動を強ひて抑へようとする。膝の上の手巾を、両手で裂かぬばかりに堅く握つてゐるのに気がついた。さうして最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでも吹かれてゐるやうに、繡のある縁を動かしてゐるのに気がついた。

團扇を拾つて顔をあげた時、先生の顔には今までにない表情があつた。

それから二時間の後である。長い夏の夕暮は、何時までも薄明りをたゞよはせて、硝子戸をあけはなした廣いヴェランダは、まだ容易に暮れさうなけはひもない。先生の頭の中は、西山夫人のけなげな振舞で、未だに一ぱいになつてゐた。

〔評〕 これは、小説「手巾」の中の一場面です。原作に於ける主人公は、先

生――アメリカ人を夫人に持つ長谷川謹造と云ふ大學教授――ですが、その主題となつてゐるのは、此處に引いた手巾の場面です。私達は、此處で、先生「の描寫を先づ割愛し、主として西山青年の母の描寫を味ふ事にします。禮儀正しい、度しやかな、日本人の母を思はせ、女の武士道」を思はせる此の一母性の心理や性格が、いかに巧に描き出されてゐるか、諸子は上欄の批評を参照しつゝ、その外面描寫、内面描寫の手法を十分に玩味して見なさい。

### 或る姉妹

作者自身達を寫してもよければ作者のよく知る姉妹を描いてもよろしい。要は姉と妹との性格の相異を具象的に描き分けるのが此の文題の目的です。それには、何か或る一つの事件を中心にして、姉妹が各の美はしい愛情を示し合つたとか、或は又悲しい争ひを續けたとか、さう云ふ場合に於ける二人の心理や性格を描き分けるのが便利でせう。



### 車中のスケッチ

汽車又は電車内に於けるスケッチです。勿論人々の種々な姿を寫すのが目的ですが、それ等の人物の心情にまで徹した観察をして欲しいものです。注意深い観察なら、必ずや人々の心の奥まで見透すでせう。傲慢に席を廣く占領してゐる人の心、席のあくのを猫の様に狙ふ目のひらめき、老人や子供連れには直ぐ席を譲らうとする人の心、正體なく眠りこけてゐる人の姿など、この狭い車の中にも、人生の色々な相すがたが見えるものです。

### 繪の人物を文に

特に、人物畫の趣を文章で表すのです。山川の風光、室内の様子など、その背景となるものに就いても、適切に描く事が必要ですが、就中人物の活動なり風姿なり心情なりを生き／＼と描き出すのが本題の主目的です。しかし繪畫と云ふものは、或る瞬間を捉へて固定せしめたものですから、これを文章で表すとすれば、どうしても時間的に自由な想像を加へて描寫しなければなりません。想像力を縦横自在に活躍させて、趣味豊かな文章に纏め上げて見なさい。



實  
筆象印本堂



一五 詩

一、詩とは私達の感情をその溢れるがまゝに最もありのまゝに最も直接的に歌ひ出したものが詩です。

あはれ わが胸こそ

あめつちの あやしき鏡

悲しくも うれしくも うつるがまゝに

くもりては また照れど……

—(生田春月)—

あめつちの姿を映しては消す不思議な心の鏡には、喜びも映れば悲しみも映るのです。怒濤暴風疾雷閃電の威喝には身も魂も消えるかと思はれ、真赤な夕焼を眺めては莊嚴平和な感じにうたれ、中空にかゝる虹霓を仰いではそのろに心のあこがれるを覺えます。そして私達は、その嬉しい時にも悲しい時にも、又、怖ろしい時にも、自分の



心が強く波うつのを感ずるでせう。この強く波うつ心をそのまま素直に單純に直接的に言葉の上に表現したものが詩です。詩の生れる境地は常に自然に對する讚嘆のみでなく、人生に對して訴へる嘆きの聲様々な想像に對する憧憬の言葉、それらが皆詩であり、詩の生れる境地です。

二詩の行に就いて 私達の感じた心持が強ければ強いほど、深ければ深いほど、心の波は強くうつのです。この心の波、感情の律動をリズムと云ひ、詩に於いてはその生命となるものです。詩は文章と違つて一句一句が別の行に書かれます。これは心のリズムを最もありのままに、最も直接的に表現しようとする所から起る現象です。後にも述べますが、詩には、各句の音数が揃つてゐるものもあり、大小長短入り交つてゐるものもあります。しかし、何れにしても、行を別ける理由は皆同じです。

雲

おうい雲よ

いういと

馬鹿にのんきさうぢやないか

どこまでゆくんだ

すつと磐城平の方まで行くんか。 —(山村暮鳥)—

悠々と流れゆく大空の雲を仰いだ時、作者の胸には限りない親しみと憧れの情が強く波うつたのです。そして其の感情の波が長く、短く、軽く、重く、いろ／＼の調子を帯びてゐる爲に、それが作者の息づかひに現れ、作者はその息づかひを、そのまま、詩の言葉に置き換へようとするから、其の息づかひのちよつとした切れ目が一句として書かれて行くのです。つまり詩の一句は作者の感情の一つの波動の姿と云ふわけです。かうして「おうい雲よ」「いういと」「馬鹿にのんき



さうぢやないか」どこまでゆくんだ」ずつと磐城平の方まで行くんか」と一つ一つの感情の波動が一つ一つの句となつて續いて行く所に、楽器で奏する音楽とは異つた一種獨得の音楽美が生ずるのです。詩は、節奏ある言葉で書かれ、繪畫や彫刻の持つ作用の外に、音楽の持つやうな作用をも多分に持つたものでなくてはならぬと云はれる理由は此處に在るのです。音楽を、無言の詩と云ふならば詩は、人間の感情のリズムを、さながらに描き出す語ことばの音楽と云ふべきです。

三、詩と童謡 童謡もやはり詩の一種です。それ故、創作の態度に於いては、詩の場合と全然同じです。只、それが子供の唄ふ詩であるか、それとも大人の作る詩であるかと云ふ一點で所謂詩と童謡とが分岐するのです。

### 既

こと こと と既より

音きこゆ。

深き夜の静けさに

なほひとり眠らざる獸は。

生みし子は二日まへ

死したりき。

母の馬さびしく居残れる。

既より音聞ゆ

こと ことと――。

―(三木露風)―

二日前に吾が仔を亡くした母馬が、夜更けになつても眠れずに、こと、ことと音を立てゝゐるといふ情景に感じて生れた詩で、その内容は童謡にも唄はれさうな内容ですが、用語は決して童謡風とは云へません。童謡の用語は、必ず子供の日常語でなくてはならぬのです。それから、



針もつ指

針もつ指に

ちらちらと

櫻の花が

散りかゝる。

散つた櫻の

花びらを

針に通せば

その昔、

珠數じゆずにつなぎて

戯れし

幼き頃の

偲おもばるゝ。

—(藤森秀夫)—

淡い感傷的な思ひ出の詩で、調子も七五調で唄ひよく、用語も「既ほどむつがしくはありませんが、内容は「幼き頃の偲ばるゝ」とあるのでも分るやうに、子供の頃の思ひ出です。童謡の内容は、あくまでも子供の眼を通して眺めた子供の世界でなくてはならぬのです。

青い蝶

木を伐つてゐると

芽がこぼれた。

青い蝶のやうな形をして

地面の上に羽ばたいてゐる。

いまに翅も飛び立つやうに

うすい葉のつばさを掻き合してゐる。—(室生犀星)—

着想には童心の影が見え、用語も内容も比較的小子供にも分り易い方ですが、決して調子よく唄ふに適するとは云へないでせう。童謡は、



子供の口から溢れ出る、自らなる音調を載せ得るものでなくてはならぬのです。勿論、世に童詩などと云つて黙讀して味はせようとするものもありますが、それとても子供の胸から自然に湧き起るあどけない、爽かな調子を具へてゐなければなりません。要するに、童謠とは、あくまでも子供の唄ふ詩であると云ふ點に、自ら他の詩との區別が立つのです。

例 文

眞 珠 貝

與謝野 晶子

①これは七五調の詩です。

①眞珠の貝は常に泣く。  
人こそ知らね大海は  
風吹かぬ日も浪立てば、  
浪に揺られて貝の身の  
處さだめず伏しまろび、

千尋の底に常に泣く。

まして、たまたま目に見えぬ  
小さき砂の貝に入り、  
浪に揺らるゝ度ごとに  
敏く優しき身を刺せば、  
避くる由なき苦しさに  
貝は悶えて常に泣く。

忍びて泣けど、折々に  
涙は身よりにじみ出で、  
貝に籠れる一點の  
小さき砂をうるほせば、  
清く切なきその涙  
はかなき砂を掩ひつゝ、



日ごとに玉と變れども、  
貝は轉びて常に泣く。

東に昇る、あけぼのは  
その温かき薔薇色を、  
夜行く月は水色を、

虹は不思議の輝きを、  
ともに空より投げかけて、

砂は眞珠となりゆけど、  
それとも知らず、貝の身は  
浪に揺られて常に泣く。

〔評〕 眞珠貝を千尋の海底に想像して、その苦境に同情した詩です。

眞珠貝の身に、目にも見えない程の一點の小砂が刺さつて、その苦しみ  
に、眞珠貝は身悶えして泣くのです。そして、その涙にうるほされて、小

砂はだん／＼玉と變つて行くのです。やがて玉は日のめぐみ、月のめ  
ぐみ、虹のめぐみを身にあつめ、あの美しい眞珠と成つて行くのですけ  
れど、それとも知らずに眞珠貝は、いつまでも、浪に揺られるのが辛いと  
云つて泣いてゐるのです。何と云ふ美しい想像でせう。そして又何  
と云ふ暗示の豊かな想像でせう。私達は、こゝに一人の不遇な天才を  
思ひます。——彼は冷酷な社會に壓迫され、貧苦の重みに喘ぎながら、  
自己の才能を思ふやうに伸ばし得ないと歎いてゐるのです。しかし  
その苦境こそ實は彼の麗質を鍛へてくれてゐるのです。それに又人  
生とても必ずしも冷酷だとばかりは云へないのです。多くの天才達  
の教が彼の知らぬ間に彼を導いて、彼の技はいよ／＼輝きを増して行  
くのです。それなのにやはり彼は自己の軋軋を歎いてゐるのです。



一六自由詩

一、自由詩とは音数の制約を無視して作つた詩を自由詩と云ふのです。我が國の詩は昔から五七調とか七五調とか云つて、いつても或る定まつた音數上の形式を守つて作られて來たのです。現代の詩にも未だ此の定型律の詩が、時折あらはれてゐます。

銀 杏

十月の朝の辻に

並びたつ四本の銀杏

ゆきすぎて、またふりかへる

青空の日光はうすし。

あゝ神も寂しきときは  
翻とりてうたひたまふか。

十月の朝の空の

燦けき金の四行詩。

—(西條八十)—

これは五七調の詩です。五七調の詩は、概して、素樸ではあるが莊重で、適勁な趣を具へてゐるものです。我が國の古い歌は、皆この五七調です。それからまた、

秋 果

秋は悲しきものならし。

玻璃の器にもられたる

朝の葡萄の色あひは

東雲に見る濃紫。

さては青磁の海の色



いづれ大氣を吸ひとりて

いみじき露を含みたる

このつぶら果に

ふさはしき。

—(大木篤夫)—

これは七五調の詩です。七五調の詩は概して、優美であつて、繊細流暢の響をもつてゐるものです。中古以來最も廣く行はれたもので、明治の所謂新體詩などには、専ら此の調子が用ひられたのです。

或る定まつた音數による、形式の整つた詩は、五七調・七五調の外にも、色々な試みが爲されたのですが、要するにかう云ふ定型律の詩は、一方には快い韻を保ち、他方にはその韻に伴ふ色々な氣分を含める事は出来ませんが、それかと云つて此の音數の制約にばかりとらはれてゐては、とても生き／＼した心の律動を表現する事は出来ないのです。私達が内心の韻を忠實に表現しようとするれば、音數

の制約には束縛を感じて來るのです。そこで、かう云ふ制約をすつかり棄て、了つて、自分の思ふところ感ずるところを、自由に大膽に歌ひ出したいと云ふ、全く表現上の要求から自由詩と云ふものが生れて來たのです。さうして此の動向は他面に於いて、口語詩の發達をも促したのです。それ故、今日見る詩の多くが、口語を用ひた自由詩となつてゐるのです。

### ある夜明

朝はやく庭へ下りると

まるで山間の夜明けのやうに

冷たい夥しい露が

重く土の上にたまつてゐた

まだ日はのぼらない前

私は生きものゝやうな土が



だんだん空の明るみに呼吸してゐるのを感じた。——(室生犀星)

かう云ふ自由な詩形を見ると、いかにも歌はんとするところを自由に歌つてゐる態度が、よくうなづけるでせう。

二、内心律といふこと　それでは自由詩に於ける長短緩急の節奏は何によつて作られるかと云ふに、これを説く爲には、内心律内在律内容律(心律)に就いて述べねばなりません。内心律と云ふものは實に詩の眞髓であり生命となるものですが、その説明は現在の皆さんにとつては稍難解な問題です。しかし其の大體の事は、前課を學んだ時既に了解が出来てゐる筈です。内心律と云ふのは、つまり私達の内心に躍動する感情の波を云ふのです。心のリズムです。これを内心の微妙な韻リズムと云つてもよいのです。自由詩では、從來の形式的な音數上の調子——即ち定型律の外面的なのに慊らずして、内心に躍動する波のひゞきを、そのまま言語に寫し出さうとするのです。

心の呼吸から生れる格調、それが自由詩に於ける格調です。

朝 あ け

朝だ

朝霧の中の畑だ

蜀黍とかぼちや、豆、芋

——そして

わたしは神を信する——

まだ誰も通らないのか

この畑なかの徑みちを

わたしの顔にひつかゝり

ひつかゝる蜘蛛の巢

その巢をうつくしく飾る朝露

此のさわやかさはどうだ



——いまこそ

わたしは神を信ずる。

—(山村暮鳥)—

朝霧のこめた畑なかの小徑を歩いてゐて、神の美はしい攝理を感じた心の律動が、この詩の一句々に美しい調子をなして表れてゐるでせう。

三、自由詩の作り方　それ故、自由詩を作るには、先づ何よりも、内心の律動を最もありのままに、最も單純に、最も直接的に、表現する事が根本的要件です。同時に、詩作する人の最も心を用ひなければならぬのは語です。如何にすぐれた思想や清新な感情を内に藏してゐても、これを表現すべき語の微妙な味や、はたらきを解して、之を自由に驅使し得なくては、決して立派な詩にはならぬのです。しかし、さういふ詩が、初めから自在に書けるものではありません。室生犀星氏でさへ、「詩歌の城」と云ふ詩の一節に、

詩や俳句を一しきり輕蔑してゐたが

この頃中々好い味のあることが解つた。

一日に十枚文章を書いてゐても

詩や俳句が一行一句も出來ぬことがある。

詩や俳句の王城は誰でも敲けるものではない。

と嘆じてゐます。しかし生み出す時の苦痛が大きいだけに、感情の堰が破れて、それが美しい詩の表現を得て眼前に生れ出た時の歡喜は更に大きいものです。千家元麿氏は此の創作の喜びを、

見えて來る時の喜び

(それを知らない人は作家ではない)

平常は生きてゐても本當ではない)

自分の内のものが生きる喜びだ

自分の内の自然或は人類が生きる喜びだ

作家はその喜びの使だ。



と歌つてゐます。自分の内の自然或は人類を生かすか殺すかは全く語ことばによるのです。ところが、それ程詩に於いて大切な語ことばの持つてゐる微妙な味あじひといふものは、到底口で説明する事は出来ないもので、たゞ多讀多作の上で、自ら感得するより外はないのです。それは、初心の間は、名家や先輩の作品を読んで、之を模倣試作して見ることです。どんな大家でも初めのうちは、模倣の域を脱する事は出来なかつたので、寧ろ此の間にこそ、其の豊かな創作能力は培はれたのです。しかし模倣は、どこまでも創作への階梯です。模倣試作によつて詩の心持や節奏などが分つて來たら、いよいよ眞の詩作に入るべきです。尤も模倣試作の際とても、出來得る限り作者の個性が出るやうに、原作の句があまり高く出ないやうにと工夫すべきです。此の苦心もない單なる模倣は、大した利益を自分に與へるものではないありません。模倣はたゞ獨創力を誘ひ出す爲の方便に過ぎぬと云

ふ事を銘記すべきです。自由詩を作るに當つては常に内心の韻うたに忠實な表現をと、たゞそのみを求めて行けばよいのです。

例文と練習

球

根

河井 醉 茗

霜の降りた朝

球根を掘り出した。

① 日に照した

水分を去つた

乾いた

干した魚のやうに

生氣が抜けた。

併し、

球根は生きてゐる。

① 生氣が抜けた  
しかし球根は  
生きてゐる。  
これが驚かず  
にゐられるで  
せうか。







④出沒自在な風の姿。そして又、愛すべきへうきん者の風の姿。

悪戯をしたりする。

それは人間にあやかるとだ。

④見給へ、さつき水の底に隠れた風だが、

すぐにまた向うの土手に現れ、

大きなあたまを持ちあげる。

そして、何だか笑つてゐる。

〔評〕 怪物のやうな、それでゐて一種の親しみの感じられる「風」へうきんもの、「風」悪戯つ子の「風」——實に奇抜な比喩法によつて、よく「風」の姿を生動させてゐます。詩の一行は作者の感情の一つの波動の姿ですから、行の別け方は、決して無意味に、又勝手氣儘に行ふ事は許されません。この作者の心持は、この詩に書かれたやうな行の別け方でなくては表現出来ないのです。例へば書き出しの二行だけに就いて、これを色々違へて行を別けて、試して見なさい。如何なる行の別け方によ

れば怪物じみた風の姿が現れて来るかを。

月の出

木下 柰 太郎

①眞黒な椎の繁みか

ほんやりと黄ばむのは何であらうぞ。

②またお聞き、そらあのやうに

さはがしい溪流の音にまぎれぬ

あのさらさらと云ふ聲は何處でするのか。

③もう秋になつたのね。

④山の湯はいつも寂しく

いつ夏が去つたのかわからぬけれど

されぎれに蟋蟀がなく——

こほろこほろ、こほろ、こほろころ。

④あれ、ごらん、満月よ

①椎の木か何かの黒々とした繁みから月が今出ようとするところ、その豫感の描寫。②これもさらさらと鳴る湯の音の、まだそれはつきりとは分らぬが、それかあらぬかと不審がりつゝ、何かを豫感する感覺の描寫。③四季いつとても寂しい此の山の湯にも蟋蟀がこほろこほろと鳴いてゐる。あゝ、もう秋になつたのだと氣づく。そしてしんみりとなる④始めて月がは



つきりとその姿をあらはして来たので、<sup>④</sup>始めてはつきりとなつて来た椎の木の繁みです。  
この行までは月光が暗い湯壺の中へ射し込んで、湯の深に浮んだ様子<sup>⑤</sup>の譬喩的描写<sup>⑥</sup>。  
浴槽の中には一人の若い女がゐたので、その肩のあたり<sup>⑦</sup>に月光が射して、それと同時に、波か黄金かと思ひ惑はせる美しい光がきらきらと湯の面に輝くのです。

なんと静かに昇ること、大きな月が、しづしづと……まんまろく……  
椎<sup>⑧</sup>の木の梢をのぼる……

丁度小さい鯉魚<sup>⑨</sup>が

水の上まで浮いて来て

びた／＼水を吸ふやうに、

雨で濡れた椎の葉の

深い繁みを抜けて来た

ふるへるやうな満月が

暗い湯壺へ射し込んだ。

湯壺<sup>⑩</sup>の中のたをやめの

肩のあたりにああたつた

波か黄金か、きいらきら。

〔評〕 秋の、山の湯の、月の出をうたつた實に美しい、感覺的な詩です。

詩は感情のリズムを最も直接的に表現するものですから、散文とは違つて出来るだけ説明の語を加へないやうにします。この詩の第二聯は稍、説明に陥つてゐますが、それにしても全體の調子を破る程ではありません。そののみか却つて詩境を落つかせる薬味とさへなつてゐます。第一聯に於いては、微妙な豫感のふるへが巧に寫し出され、第二聯の半頃からだん／＼童心の境にまで達し、第三聯に至つては、遂に格調が童謠風の七五調に轉身してしまつてゐるのも妙です。

### 茶の花

室生犀星

わたしは茶の花が好きです。

あの花びらが冷々と咲いてゐるのを見ると、わたしの心は薄荷<sup>⑪</sup>を舐めたやうに、



すゞしく静かになるのです。  
古い染付物の壺などの  
手ざはりを試みてゐる一瞬のやうに――

茶の花の蕊を指さきで揉むと、

何といふ滑つこい感じがすることせう。

その黄いろさは濃く温かい。

そして何と云ふあつさりした蕊で、

脆いほろほろした、悲しげな氣はひを持つてることせう。

みんな俯向きがちで、

空の色も映さずにある花です。

幹も葉も古い鐵のやうに健康であるのに、

この花ばかりは沈みがちに、やつと樹にもたれてゐるやうだ、  
思ひ悩んでゐるやうだ。

清らしげに――

〔評〕 この詩に就いては、與謝野晶子氏の批評がありますから、次に引用しませう。「作者は、つゞましい静かな茶の花を愛して、其の花から受ける、いろ／＼の感じを、細かに、優しい調子で歌つてゐる。私も近年、茶の花が好きになつて、幾株かを庭に植ゑた程であるけれども、此の詩を讀んで、私の感じ方の、まだまだ粗略であつた事に氣がついたのである。それで、去年の冬、じつと茶の花を見直してみると、室生氏の此の詩の味ひが一層よく感ぜられた。好い花の詩を讀むと、花に對する愛が擴がる。この意味で、藝術は人生を豊かなもの樂しいものにする。皆さんも、此の詩から、いろ／＼の新しい事を教へられるであらう。皆さんの愛、觀察、感受性、詩の表現法等が、此の詩に由つて啓發せられるであらう。薄荷を舐めたやうに涼しく静かな感じ、古い染付の壺の手ざはりを經驗してゐる一瞬のやうな感じ、是等の繊細な感激の表現だけでも、皆さ



朝の歌

んに新味を以て迫る筈である。此の詩は、すべて同じやうな、尊い感激の表現で満たされてゐる。茶の花と共に、詩人の心は静かに澄み入つてゐる。詩も亦静かな旋律を以て、柔かな抑揚を示してゐる。

日は未だ昇らず。草葉の露が白銀の玉と輝き、東雲しのめの空が匂やかに彩られてゐる頃から、やがて日の光がキラ／＼と木々の梢にさし入り、すが／＼しい朝風が心地よく流れ出し、葉末の露が一齊に讚美の輝きをあげるに至るまでの目覺め行く天地の活動は、正しく詩の好題材でせう。

冬 枯

草も木も、野も山も、さむ／＼とたゞ寂しい冬景色。しかしそれは果して凋落であり枯渴の姿でせうか。裸木が北風に撓む時、それは果して生なき弾力でせうか。氷雨にたゞかれ、泥にまみれた路芝は、果してあはれをとゞめるだけのものでせうか。生命の冬籠りの姿を歌ひ上げて欲しいものです。

す み れ

これは必ずしも董でなくとも、諸子の最も好む花であればよいのです。例文「茶の花の観察や表現法を範として、諸子の胸にいだく愛や感激——内心の韻を、さながらに寫し出すことです。」

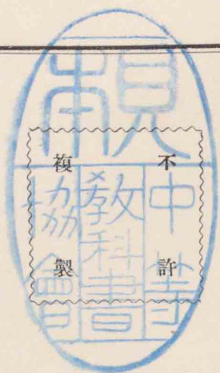


昭和九年一月五日印刷  
昭和九年一月十日發行

女子現代作文  
定價各冊金七拾五錢

著者 吉澤義則

發行兼印刷者 星野敬一  
京都市上京區丸太町通堀川西入  
西丸太町百七十一番地

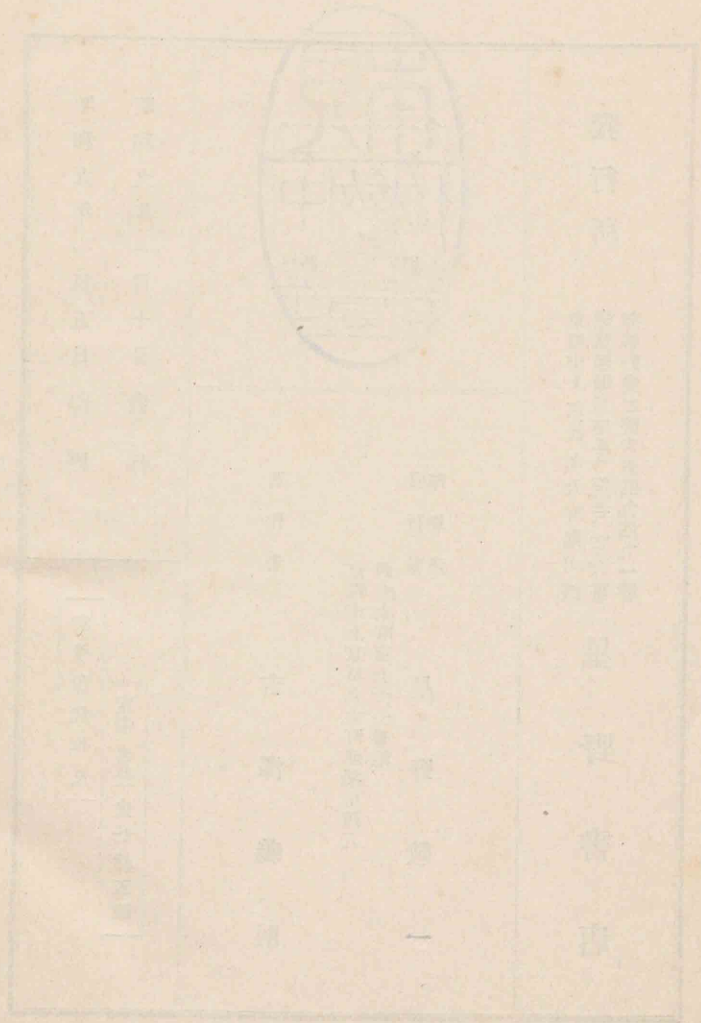


發行所

京都市上京區丸太町堀川西  
電話西陣④三三三三、三三三三、三三三三  
振替貯金口座大阪四九四九一番

星野書店







広島大学図書

2000068977



図書  
34  
977